

---

# HOPE & PEACE

麻婆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H O P E & P E A C E

### 【Nコード】

N 3 9 4 9 T

### 【作者名】

麻婆

### 【あらすじ】

推理小説の探偵に憧れる助手と、それを否定するうらぶれた私立探偵。ある依頼をきっかけに、探偵は自らの過去と対峙する。そして助手は、そんな探偵に違和感を覚え始める。デコボコなんだかデコボコなんだかボコボコなんだか、そんなコンビが奔走する私立探偵物語。

## 1・探偵と助手はご飯を食べる

お世辞にも綺麗とは言えない小さな事務所。むしろ汚いと罵られても「そうですね」とうなずく自信がある。目を凝らせば隅々に積もる埃。座っているイスと机も例外ではない。掃除はしているつもりだが、どうも苦手であった。窓から射す薄汚れた光が、ただよう埃をチラチラと視認させる。

手にしていた古い資料を机の引き出しにしまい、鍵をかけると、私は深く吸い込んだ煙草の煙を吐き出した。煙は筋となって陽光をかすめ、ヤニで黄ばんだ天井や壁に染み込んでいく。そして私は許容量をとうに超えた灰皿へと、短くなつた煙草を押し付けた。じゃり……、と火種が砕ける音が心地よい。すき間をねらつて吸殻を突っ込むので、灰皿はさながら前衛芸術のようになっていく。

「犯人はズバリ貴方だ！」

突然、そんな若々しい声が頭上から降ってくる。頭を軽く叩かれた気分だった。

声の主は葉月小夜子はつきさよこという、この私を小説のような名探偵と信じて疑わない、先月雇ったバイトである。妙に悲しげな気だるい瞳と、私に迫りそうな高身長、手入れが大変そうな長髪が彼女の特徴だ。服装は灰色のタイトなパンツスーツで決めている。喋らなければどこぞの美人秘書に見えなくもない。だが、その目立つ容姿は探偵にあまり向いてはいない。

小夜子は日焼けを知らないような細い指を、イスに座っている私へ向ける。腰までの黒髪が楽しげに揺れた。

「なんのつもり？ 小夜子くん」

先ほどまでなにやら考え込んでいたかと思うと、急に「犯人はズバリ貴方だ！」と私を犯人呼ばわりだ。

「なんなの？」

問いかけを繰り返した私に対し、小夜子は自信に満ちた笑顔を浮

かべた。「もちろん仕事の訓練すよ」

「はあ」と意識せずに溜息が漏れた。

「小説の読みすぎだ小夜子くん。私の所に来る依頼なんて、浮気調査か素行調査、失踪人探し位だ」

ちなみにペットの捜索は断っている。

「まったくまあ〜！分かってますよ？ 所長は隠しているんすね？ 本当は陰で殺人事件を大胆な推理でドカンと解決しまくっているんでしょ？」

「そうでしょ？そうでしょ？ と近づいてくる小夜子は凄くうつつうしい。」

古びたジッポアの澄んだ音を鳴らし、私は二本目の煙草に火を点ける。ジリジリ焼ける煙草の先端が導火線のように見えた。いったいその先には何が待っているというのか。知りたくもないが。

「吸い過ぎすよ所長」

私の仕事はうらぶれた私立探偵。29歳にしてうらぶれてしまった。人生は分からぬものである。

「前にも言ったけど、日本の探偵で殺人事件を解決するなんてことはまずない。そういうのは警察の方々が地道な捜査で解決するんだ」「実はここに隠し扉が！」と言って小夜子は事務所のキャビネットを豪快に開け放つ。

小夜子は人の話をあまり聞かないのが仕様である。

もちろん隠し扉なんてものはなく、ただ私のコートやらがあるだけだ。

「所長！」

「なに？」

「今日はどんな難事件を？」

「夕方から夫の浮気調査」

「ほう！ それはどんな殺人事件なんすか？」

私は二度目の溜息をもらす。「あのねえ……」

私がかもう一度説明をしようとしたとき、小夜子の携帯電話が着信

する。

説明をする気も失せて、私はイスの背もたれに深く体重を預ける。ぎしし、と軋むイスが年季の入り具合を示している。私は煙草を灰皿で揉み消し、先日行った浮気調査の調査報告書をながめる。パソコンの画面に映し出されている調査報告書は、浮気相手の身元や身辺情報はもちろんのこと、いつどこでどうやって知り合ったか、ホテルにはどちらから先に入って行ったか、その前になにを食べたのか、どちらが支払ったのかなど、見聞きした全てのことを詳細に記してある。どんな情報が役に立つのかは後から決まる。この報告書の出来が信頼に繋がりに、依頼も増えるというわけだ。

「うわっ！ オヤジからか……」

小夜子はしかめっ面で携帯電話をいじっている。どうやらメールが届いたようだった。「こんな事ならメールの仕方なんて教えるんじゃないかったな、くそ！」と悪態をつきながらも、小夜子は律儀に返信しようとしているようだった。

「お父さん、メールできるんだ？」

「聞いて下さいよ所長！」

人の話は聞かないが自分の話は聞けと言う小夜子。

「どうした？」

憤然として小夜子は言う。

「オヤジのやつが探偵のバイトなんて止めろって言うんすよ」

「実に賢明なお父様ではないかね」

小夜子は机をダンと叩き、「自分の夢は殺人事件を解決する事なんです！」と鼻息を荒くする。勢いあまつた黒髪が私の顔にかかり、不覚にもいい匂いだと思ってしまった。

「殺人事件は警察の仕事」

私は小夜子の髪の毛を払いながら平坦に言った。

「夢なんです！」

小夜子は耳を貸さない。

夢があるということは、それだけで素晴らしいことだと思う。そ

れを見つけれないまま一生を終える人もいるであろう。私にもさし当たって叶えたい夢などない。だから、「そうですね。それはよい夢ですね」と今度は軽くあしらう。

「ですよね！ オヤジにも言い聞かせないと……」

小夜子は軽い身のこなしで私の机に座ると、携帯電話を再びいじり始める。メールの返信を作成しているのだろう。

私は机の上にある、小夜子の小振りなお尻がのっかっている書類を引っばる。予想外の抵抗の少なさで抜けた書類は、夕方の浮気調査で使用するものだ。数週間で調べた調査対象の行動パターンその他もろもろ。

しかし、人間の心理をパターンで捉えようとしてはいけない。状況や体調で展開が変わることもある。ある程度は依頼人から聞けば話は早いのだが、依頼人である妻は夫の行動を把握できていないようだった。「残業が多くなりました」とだけ聞いている。むしろ私の方が知っているくらいだ。この調査に小夜子は連れて行っていない。事務所の掃除を申し付けたのだが、それも無駄に終わってしまった。小夜子も掃除は苦手なのかも知れない。

「小夜子くん。そろそろお昼でも食べに行こうか」

メールを打ち終えたであろう小夜子に私は声をかけた。腹が減っては尾行も出来ぬ。

「牛乳とあんパンすね！」

「違う。隣のビルの食堂だ」

小夜子はウンザリした顔で「あそこ不味いじゃないですか」と言う。

「そうか？ 私はお気に入りだが……」

「所長の味覚は崩壊しているとしか思えません」

「人それぞれだからな。さ、行くぞ」と私は歩き出す。

「あ、待って下さいよ！」

「小夜子くん。鍵、閉め忘れないように」

外に出ると、秋の冷えた空気が首筋をなでていく。私は着古したスーツの首元を片手でおさえた。

私の事務所の入っている古ぼけたビルの隣にある、更に古めかしい小さなビルの一階。錆びて文字通り傾いた看板を背負って営業している食堂がある。周りには企業のビルなどがあるにもかかわらず、あまり繁盛していないのは、小夜子の言うとおり味が悪いからなのだろうか。味音痴の探偵とはいかかなものか。今のところ支障はきたしていない。

「所長。なんでこの食堂、『夢食堂』っていうんでしょうね？」

「店主のおばちゃんの名前が夢なんだ」

小夜子は「ウソ吐かないで下さいよ！」と言って私の背中をバシッと叩く。意外に力強かったので背筋が伸びた。

「どうしたらあんな敵ついおばちゃんが、『夢』なんて可愛らしい名前なんすか」

「夢があつて良いじゃないか」

「なーに上手いこと言つたと思つてるんすか」

私は上がりそうになった口角を緊急停止させた。

小粋さの欠片もない小夜子の言葉は無視して、私は辛うじて機能している自動ドアの前に立つ。がったんがったんと、手で開けたほうが早そうなドアの向こうから、脂っこい匂いが鼻孔へただよってくる。

匂いと共に、「いらっしやせー！」と威勢のよい夢さんの声が鼓膜を震わせた。

恰幅がよく、見事なだんごつ鼻を持ち、髪には名称不明のパーマ。そして、薄汚れたエプロンを付けたおばちゃんが、ドスドスとまるで漫画みたいな足音で現れた。

「おお、探偵さん。いつもありがとね！」と夢さんは豪快に身体を揺すって笑った。

窓の少ない店内は、昼間でも息たえだえの蛍光灯がまたたき、ひび割れた壁はうちの事務所と同じくヤニで黄ばんでいる。

「おばちゃん、親子丼」

「自分、チャーハンで」

夢さんは「あいよ！」と言って調理を開始する。中華鍋をいともたやすく操るさまは、夢さんの腕力を物語っているのか、はたまた長年にわたり染みついた技術なのか。興味があるのでいつか尋ねてみよう。

ところで。

「小夜子くん、いつもチャーハンだな」

私の言葉に小夜子は顔をしかめる。

「チャーハンがギリギリ食べられるんすよ」

「そうか？ チャーハンが一番駄目だと私は思うが」

小夜子は口を尖らせた。

「所長はやっぱりおかしいす。所長と結婚したら料理作るのが大変そうす」

「断る」

「何がすか？」

「小夜子くんと結婚は出来ない」

「例えばの話すよ！ なんていきなりフラれなきゃならないんすか！」

小夜子は不満そうにテーブルを揺らした。

「そうか。例えばの話しか……。まあ、そう怒るな。今日は奢ってやるから」

そう告げると、小夜子の瞳は急に輝きだし、気だるそうな半開きの目蓋が全開になる。「……………目、意外と大きいんだね」と言ったが、小夜子は聞いていない。

「やたー！ もっと頼んじゃおうかなあ」と店に張られている手書きのメニューを覗む。

そんな現金な小夜子を見て私が苦笑いしていると、夢さんが厨房から声を張り上げる。

「探偵さん！ 今日腹減ってるかい？」

「ええ、ペコペコです！」

「そうかい！ なら大盛りにしてやるよ！ そっちの彼女は？」



小夜子は水を噴出して立ち上がる。「誰が彼女すか!!」  
「そういう意味じゃないだろ小夜子くん」と私は憤る小夜子をなだめた。

「あ、そういうこと？ おばちゃん、大盛りで！」

「あいよ！」

夢さんの返事を聞いて、私は仕事の話しを切り出した。

「小夜子くん、今日の夕方からの仕事なんだが」

「あ、殺人事件すね」

「妻からの依頼で、夫が浮気をしていないか調査しているんだ」

「遺体はどんな状態だったんすか？」

「数週間調査した結果、夫は帰宅前に残業と偽り、自宅とは別のマンションに入って行った」

「容疑者は何人すか？」

「小夜子くん……」

小夜子は溜息を吐く。額が見えるくらい短く切られた前髪の下で、気だるげな瞳が私をまっすぐに捉える。視線を少しも逸らそうとしない。些細なものも見逃すまいと努力している目だ。

「分かりましたよ。ちゃんとやりますよ……。だからそんなに睨まないで下さいよ。殺人事件解決は自分が一人前になったらにします」  
「そうしてくれ」

私は小夜子から視線を逸らす。小夜子の視線は『あからさま』すぎる。集中力は買うが、周りが見えなくなつては意味がない。その点に関しては私もまだまだ未熟ではあるのだが……。

「で、その夫を尾行して現場を押さえるんすね？」

突然の話題立ち返りに私は少し驚く。小夜子は聞いていないよう  
で聞いていたようだ。実は優秀なのではないかと思つた。

「その通り。ちゃんと聞いていたんだね」

私がそう言つたところで、料理が運ばれてくる。

「あい、お待ち！」

ドン。私の前には親子丼。

ドドン。小夜子の前にはチャーハン。  
美味しそうな湯気が上がっている。

「ゆっくりしていきな」

そう言っつて夢さんはカウンターに座るとテレビを見始めた。

「見た目は美味しそうなんすけどね」と呟くと、小夜子是不味そうにチャーハンを咀嚼する。まるでガムを噛むヤンキーだった。

私が親子丼にがつつくと、またしても小夜子の携帯電話が鳴る。

その着信音は今時の若者にしては渋い選択だった。思わず「それ良いな」と言いかけたが、そう言わせるのが目的かも知れない、と思  
い口をつぐんだ。

「うわっ！ 今度は電話かよ」

小夜子の発言からして父親から電話がかかってきたようだ。メールでのやり取りに痺れをきらしたのだろう。メールは冷静に考えて文章を組むことができる代わりに、感情や意志が伝わりにくい。

小夜子は携帯電話を耳にあて、「なんだよ禿げオヤジ」と完全にケンカ腰の声を出す。「うるさい！ 私は探偵になるって決めたんだよ！ 文句があるなら殴ってでも止めればいいじゃんか！」小夜子の勢いは止まらない。なんとなく、焦燥感のようなものに急かされていくように感じた。

「脳みその筋トレし過ぎなんだよ」とか、「脳筋のせいでハゲてるんだよ」とか、毒を吐きまくっていた小夜子の顔が急に青くなる。

「ええ！？ そえは……ゴメンしてよ……マ、マジで？」  
それつが怪しくなるほど狼狽していた。

小夜子は通話を切ると、ゆっくりと私を見る。変な汗が出ているのか、小夜子の顔は妙なテカリを帯びていた。なんだか……、なんだか凄く嫌な感じがした。例えるなら、ペットの猫を探してくれと懇願されたときに似ている。あれは酷い。

「どうした？」

本当は無視してしまいたいが、私の様子をつかがうあたり、私にも大いに関係があるのだろう。

「怒らないで欲しいんですけど」

消え入りそうな声で小夜子は呟いた。目蓋は閉じられ、睫毛が震えている。

恐らくそれは無理だろうと思ったが、領かなければ先に進まない。だから私は取り敢えず領きを返した。

「オヤジ来るって」

「え？……どこに？」

小夜子は極上のスマイルらしきものと共に、ウィンクまでして明るく切り出したが、顔が引きつっていて大失敗だと思われた。

私は「そんなものに興味はなし」とばかりに話を進めた。

「事務所に……」

「いつ？」

「今すぐ……」

私は頭を抱えた。親子丼など食べていられる状況ではなくなった。急いで特盛りチャーハンをかき込む娘から想像するに、相当アレな父親だろうと思う。私の父親は大人しい人だったし、昔からいわゆるカミナリ親父的な人物は苦手だった。

「補足なんですけど……、オヤジは所長のことを彼氏だと思っ込んでるっす」

「……………？ は？誰の？」

「自分の……」

小夜子は照れくさそうに自分の顔を指差しあと、私に向かって合掌する。「骨は自分が拾ってやるすから、安心して下さい！」

「殺されたら呪うからな！絶対お前を呪う！」

私よりも大盛りだったチャーハンはずでに空っぽであり、小夜子はうまさうに水をごくごく飲んでいた。

北風に襟元を正した私を嘲笑うような、真っ白なタンクトップに半ズボン。隆々と盛り上がる筋肉は弾丸すら防ぎそうだ。見開かれた双眸は百戦錬磨の刑事も気後れするだろう。そして、小夜子一押し of 怪しく光る頭頂部。いまなら『脳筋』の意味もすんなり理解可能である。

落ち着いて観察すれば、ちょっとガタイのよいオッサンであるかも知れない。だが小夜子の父親は、ヤンキーのカチコミさながらにドアを蹴破って入ってきた。ドアの壊れる音と、舞い上がる埃と、非常識な人物、という3つの演出効果により、小夜子の父親は怪物に見えてしまった。

「小夜子！」

「なんだよ！」

親子は来客用のソファを挟んでにらみ合っている。今にも音を立って破裂しそうな緊張感。ドアの件は適切な処理を行えば訴えることも可能だが、面倒なのでちに小夜子の給料から天引きすることにした。私は努めてそんなことを考え、頭を冷静に保つ。

カキ……、とジツポーを鳴らすとお父様に睨まれたので、「失礼しました」と呟いてポケットにしまい込む。いよいよ居たたまれなくなつた私のジツポーは、精彩に欠く音色だった。

「探偵なんて止める。もっと堅実な道を行け。なんの為に大学まで出たんだ？」

本物の探偵を前にして、その台詞は如何なものか。父親が喋る度に腹の底がびりびりと震える。一応、小夜子の履歴書を確認しているが、割と有名な大学を出ている。頭脳は明晰なのだろう。

「そんなの決まってる。探偵になる為だよ」

小夜子は当然のごとくそう言った。なんの迷いもない、些事をも見逃すまいとする真っ直ぐな目で。

「小夜子！」

「なんだよ！なんでも呼ぶなこの八」

小夜子の罵倒は中断をよぎなくされた。父親がソファを飛び越えて小夜子に踊りかかったのだ。一息に事務所の空気が揺れ動いた。大浴場の湯船に、大柄の人が入ってきたときのアレだ。あの感覚に似た浮遊感を覚えた。

「ッ！」

小夜子は驚きの声も満足に出せぬまま、身体を硬直させて棒立ちになっている。一方、私はくわえていた煙草を机に落とした。要するに二人とも呆気にとられたのだ。

「うらああああ！」

父親の雄叫びが事務所を揺らし、小夜子の顔面を拳が強襲した。上陸用舟艇に砂浜がえぐられるように、小夜子の顔も拳によってひしゃげたのが鮮明に確認できた。破壊的な音と共に小夜子はキャビネットに叩き付けられ、とどめに書類が上からなだれ落ちる。

この父親は小夜子の言った通り、本当に殴って止めようと思ったらしい。愛娘の顔面を何のためらいもなくグーで殴りつけた。少なくともためらっていたようには見えなかった。

小夜子はピクリとも動かない。紙束からのぞく細長い手足は力なくうなだれている。その様子は手折られたヒマワリを連想させる。

「ち、ちよつと、お父さん……」

「お父さんと呼ぶな！」

「す、すみません」

動かなくなつた小夜子に近寄り、父親は「探偵なんて止める」と言い放つた。

さすがに私は割って入ろうと思つた……が。

唐突に書類が舞い上がり、バサバサと小夜子を取り巻く。書類が煙幕の役割を果たしたのか、父親は目を細めた。

「くっそおおおオ

舞う紙束を 吹雪を突き抜ける大型ライフル弾のように 小夜子の拳が唸りをあげてつんざいた。拳が顔に打ちつけられた音を、炸裂音だとか破裂音と表現してよいのか分からないが、想像以上の

高い打撃音をともない、父親の片足が浮いた。

「オオヤジがあああああ！！」

咆哮する小夜子の拳が振り抜かれた。

父親の身体がしなり、たたらを踏むもソファに足を引っかけて転倒。来客用のテーブルが真つ二つに割れた。木くずと埃が噴出したみたいに飛ぶ中、小夜子の給料がまたしても激減した。一ヶ月は夕ダ働きを覚悟してもらおう。

派手な音をまき散らし、今度は父親が動かなくなる。私は警察を呼ぶかどうかの判断を迫られていた。警察といっても知り合いの刑事だが。

私の煩悶をよそに、小夜子は倒れた父親に歩み寄る。眠たげな目蓋の下で、炯々とした瞳が父親を見下ろす。

「私は探偵になる！」

父を超えた勇者のように宣言した小夜子。それに対し、瓦礫から立ち上がった魔王のように父親は告げる。

「いまの一撃に免じて今日は帰る。だが勘違いするな。許したわけじゃないぞ」

「うるせえ！二度と来るな！」

小夜子は口の端から流血し、父親は鼻から流血。まるでむかし観た『怪獣大決戦』のような親子喧嘩だった。

鼻血を拭くと、父親は壊れたドアを踏みしめて帰っていった。

「大丈夫か？ 小夜子くん」

茫然自失の体でドアを見つめていた小夜子に、私はなるべく穏やかに話しかけた。

「……ん。大丈夫なわけじゃないですか。あの親父のパンチは半端ないですよ」

「まあ、だろっね……」

小夜子は「あ、歯折れてる……。ああ、顔腫れちゃうなあ……」と呟きながら、救急箱から薬や絆創膏を取り出している。

事務所内は元々雑然としていたが、今や戦車が通過したみたいな

状態だ。散らかる書類、倒れたキャビネット、ひっくり返ったソファ、割れたテーブルなど、元に戻すのは相当骨が折れるだろう。

「所長……」

「なんだ？」

小夜子は珍しくブルーに入っていた。

「所長はどうして探偵になったんすか？ ……んむ」

んがー、と奇声を発して、折れたらしい歯を引っこ抜き、小夜子は無造作にゴミ箱へ投げた。

「特に理由はない」

私は即答した。

「なんすか……。即答する当たり謎臭いすね……」

ふて腐れたようにジトつとした目で見てきた。

「そう言う小夜子くんは、どうしてそうまでして探偵になりたいんだ？」

「……………」

小夜子は黙して顔を伏せる。

重い話しになりそうだな、と私は予感し覚悟した。

「乙女の秘密っす」

……………聞いた私が馬鹿だったようだ。頭が痛くなってきた。

「ならばこれ以上聞かない方がいいな」

「そうすね。その方が身の為す」

乙女の秘密などどうでもよかつたし、事務所の惨状から目を背けたくて、私は机の上に転がりっぱなしだった煙草をくわえた。ジツポーをカキンと鳴らす。オイルの匂いに酔いながら、石を擦って火を点ける。吸い込まれた煙は、肺を毒して事務所の天井付近に停滞する。

「うまいすか？」

「煙草か？」

「そうす」

「うまいよ」

快楽を伴う物のほとんどは、度が過ぎると悪影響を及ぼす。特に煙草なんてものは、『ほど良い』状態というものが存在しない。身体が毒に犯されたとしても、手に入れたい快樂がある。

「……………」  
「どうした？」

小夜子は短い前髪を触りながら「すみません」と棒読みで謝った。  
「事務所の何か？」

「そうすね……。滅茶苦茶になっちゃって……。後でちゃんと片付けるす」

小夜子はつつむき、ずっと前髪を手で梳いている。その仕草は、伸びる伸びると、願いを込めているようにも見えた。恐らく前髪が長ければ目を隠し、恥ずかしさや照れくささなどを誤魔化せるからだろう。

「ああ、そうしてくれ。私も手伝おう」

「ありがとうございます」と小夜子はつつむいたまま、にっこりと微笑んだ。歯が無くなってなければ素敵な笑顔だったことだろう。

「小夜子くん」

「なんすか？」

小夜子は処置が終わったのだろう、救急箱を棚に戻しながら振り返った。

「お父さんも必死なんだろう。少しくらい考えてやったらどうだ？」

「駄目す」

即答だった。

ふむ、と考えるそぶりを見せ、「私は小夜子くんの夢を応援している」と心にも無いことをまず言った。

そして、「でも、お父さんも一応小夜子くんのことを心配で言っているんだよ」、と私は不器用な父親の言葉を代弁した。

私は今年で三十路だが、子供はいない。結婚もしていない。しかし、娘の将来を案じる父親の気持ちは分からないでもない。

「分かってますよ。オヤジは心配性なんす。母親もそうす。心配か



「けたくないな……とも思ってるす」

「ならどうして……」、「というのは愚問であつたらうか。」

「嬉しいんすよ」

「え?」

少し予想外の返答であつた。

「心配してもらえて嬉しいけど……反抗するんす」

「……………」

それはまた偏屈で難儀な奴だな……いや、そんなことはないか。

自分の目指す将来が、周りの願う将来と食い違つのは、ままあることだ。見据えた未来が揺るぎないものであればあるほど、摩擦は大きくなる。自分を心配する人の気持ちは嬉しいし理解できるのだが、それを振り払つても目指したい未来がある。まさに小夜子と父親がそうであるように。

「自分、あるべき時に反抗期が無かつたらしいんすよ」

小夜子は呟いた。私が考えていたことと、どこか繋がっているような発言が少し可笑しかった。

「ふふ。それが今だということか?」

「お? 所長が笑う所なんてレアすね。ちよつと萌えるす」

小夜子の眉毛が楽しそうなアーチを作つたので、私は慌てて無表情を取り繕つた。

「ははは。……まあ、そうかも知れないってことすねえ」

「それは良かった。反抗期が無いと病気だ、とまで言う奴がいるからな」

小夜子は大きく笑い、「じゃあ、今までは異常だつたんすね」と言った。「確かに自分、ほぼ親のいいなりで育つてますしね」とも、「私も似たようなものだ」

自嘲気味な笑みをこぼして、私は煙草を吸つた。

「探偵は親の意向に沿つてたんすか?」

「……………」

煙草を吸いながら喋ることはできない。

「だんまりすかあ……ははは。所長はミステリアスっすね」

「そうだ。探偵はミステリアスが売りだからな」

かなり適当な事を私は言った。

「そうすよね！」

力いっぱい同意された。

「そんな訳ないだろう小夜子くん」

「ミステリアスな男性は女性にモテるらしいすよ」と相変わらず人の話しを聞かない小夜子。しかも、売れない雑誌にでも書いてありそうな、当てにならない情報だった。

「そうか？ まあ……ありがとう」

「結婚とか考えないんすか？ 所長の年齢だと結婚してもおかしくないすよ」

確かに人は三十路を過ぎても独り身だと不審がられる場合がある。田舎だと特にそれが顕著だ。そういう意味では結婚も悪くないが……。

「私に結婚は向いていない」

そう言うと、小夜子は難しそうな顔をして「そうすかね」と呟く。

「それに、うらぶれた私立探偵と結婚したがる人もいないだろう。」

小夜子くんだって嫌だろう？」

「自分すか？ 自分は別に平気すけど」

あっさり答えられて、狼狽した自分がなんだか酷く恥ずかしかった。

「浮気されたら嫌だしな」

私は煙を吐き出しながら言った。

探偵は涙の再会とか感動的な場面にも出くわすが、だいたいは陰謀、策略、憎悪、欲望、執念、嫉妬など、人間の暗い部分に触れることの方が多い。

私の答えに「ほう！ 意外な一面すね！ ちょっと萌えるす……」

いやこれはなかなか」と笑った。いちいち萌えないで欲しいものだ。

「さて、浮気と言えば、そろそろ行こうか」

私はすっかり短くなった煙草を灰皿に押し付ける。じやりり……。浮気調査の依頼を完遂しなければならぬ。事務所の整理は後回しだ。調査結果によれば、今日の仕事終わり、夫は件の別マンションに行く可能性が高い。

「こんなもんでいいすかね？」

「ああ、鍵がかかればそれでいい」

あれから私と小夜子は、とりあえず壊れたドアに応急処置を施して、開閉可能にしてから出かけた。

「いよいよ殺人鬼と対決すね！」

「小夜子くん……」

「ゴ、ゴメンして……」

次話へつづく

## 1・探偵と助手はご飯を食べる(後書き)

最後まで読んでくださった皆様へ。  
まずはありがとうございます。

この時点ではまだまだ序章です。  
たいしたことも起こっていません。  
所長と小夜子を気に入っていただけのなら、続きもぜひ読んでいただければ幸いです。

(続きは鋭意執筆中です)

では、またのお越しをお待ちしております。

## 2・探偵は少女で夢をみる

私の事務所から二つ線を乗り継いだ街のファミレス。ドリンクバーを頼んで座った窓際の喫煙席はさほど混んでいなかった。私と同じく煙草に依存して、明日を呪う人間不信者共が数人いるだけだ。もくもくと吐き出されている煙草の煙が、それぞれ人の想いを形にして現れたら、さぞ面白いだろうな、と想像してみる。が、すぐにそんなのは嫌だな、と考えるのをやめる。

「懐かしいなあ、この店」

対面の小夜子は店内を見回して呟いた。店のそこかしこに存在する、懐かしい思い出を探すように。

「昔は良く利用していたということか？」

「そうなんすよ。目の前の高校、自分の母校なんす」

「そうだったな」

それは履歴書を見て知っていた。禁煙席では学生が退屈そうにモラトリウムを享受していた。

「喫煙席に座るのは初めてです。良くここで友達とお喋りしたなあ。遠い眼をして懐古する小夜子。」

「どんな話しをしていたんだ？」

調査対象が現れるまでの数時間、少しばかり小夜子の昔話を聞いてみることにした。小夜子に友達がいる、それに驚いたことは口にしないでおこう。怒らせたらパンチが飛んできそうだ。

「平凡なもんすよ。誰が誰を好きだとか、そういう類の話しっす」

「青臭いな。聞いているだけで恥ずかしくなってくる」

「ホントすよ！ よくあんな盛り上がったもんすよ。自分はだいたいで聞いているだけでしたけど」

少し照れくさそうに頭をかく小夜子。そんな平凡な高校生だったが、今じゃ怪しい探偵の下でバイトなんかをしている。世の中どう捻じ曲がるのか分かったものじゃない。小夜子を捻じ曲げたどこか

の誰かに説教してやりたくなかった。しかし曲がった先で、正すこともなく引きずりこんでいるのは私である。自分のことを棚に上げるのは得意であった。

「所長はどんな学生だったんすか？」

小夜子の昔話から私の話しへすり替わった。さてどうしたものか。私は勿体つけるようにジツポーを鳴らし、煙草に火を点けた。煙の向こうにかすむ小夜子の気だるげな瞳に、持ち前の好奇心が宿る灰皿に煙草でリズムを刻んでから、私は苦笑いをうかべてこう言った。

「昔のことは忘れたよ」

「なーにカツコイイと思ってるんすか」と笑う小夜子。

別に思っちゃいなかったが、否定するのも面倒なので放って置いた。

それから長い時間、黙って外を眺めていた小夜子が「ところで所長。このファミレスで張ってるって事は、調査対象はそのガツコの教職員なんすね？」とファミレスに入って、私が十本目の煙草に火を点けたころ、どうでも良さそうに尋ねてくる。

小夜子の言う通り、調査対象は小夜子の母校の教師だ。生徒の鏡たる教師に浮気の疑惑が上がるとはなんとも嫌な気分だった。だが所詮は人の子。しかも、私の勘からすると今回は黒だ。

「その通りだよ」

「そうすか……。自分、センスは結構好きでした」

それは嫌な仕事になるかも知れないな、と少しだけ小夜子に同情した。

「名前はなんて言うんすか？」

私はビジネスバッグから、フォルダに入れてある書類を小夜子に差し出す。

「長浜……」

その名を見つけた瞬間の小夜子の顔は、父親が殴りかかってきた時よりも驚きに彩られていた。そのくせ、声は通夜の出席者のよう

に押し殺されていた。『乙女の秘密』とやらの核心に迫るものがあったのかも知れない。

「長浜センセすか……。そうすか……。ふーん」

小夜子の顔が翳る。かげ

「好きなセンセか？」

「んーん、超嫌いでした」

私のくわえていた煙草から灰がポトリと落ち、テーブルでわずかに碎ける。私は短くなった煙草を灰皿へ垂直に押し付けた。そして残りのメロンソーダを飲み干して席を立つ。支払いは事前に済ましてあった。

「時間だ小夜子くん」

「了解す」

小夜子も冷めたホットコーヒーを飲み干して立ち上がった。外はすでに夕景へと姿を変えていた。

ながはまようすけ

長浜洋介。三十八歳。子供無し。高校の美術教師。細身で中世的な面立ちをした男。しかし、その太目の眉からはつきりと男性を感じ、どこかちぐはぐな印象のある男だ。この数週間で穴が開くほど見てきた顔だ。

私と小夜子は夕方の雑踏へと紛れ込んだ。今の私達の格好は汎用性の高いスーツ姿だが、その街によってはスーツ姿というのは目立つことがある。私は色々なバリエーションの服を事務所に用意しており、出かける街によって使い分ける。あえて一度も洗濯せずに着古して汚れた服も役に立つ。何事も目立たないことが探偵の基本である。尾行相手に振り向かれたら、それでお終いだからだ。

しばらく他愛も無い会話をしつつ、長浜の歩調に合わせて、見失わない程度の距離を開けて尾行していった。尾行の基本は二人一組だ。他の探偵に頼むこともしばしばある。本来であれば、小夜子に別角度から尾行させるのだが、まだ単独で行動させるわけにはいかない。単独で行動できるようになれば、嘘っぱちの熱意に騙され、

小夜子を雇ってしまった失敗も返上できるといふものだ。

長浜はあくびをかみ殺しながら歩いている。大抵の人間は、まさか自分が尾行されているとは思わないものである。長浜もその内の一人だろう。だからと言って、それが気を抜く理由にはならない。一度尾行がばれると相手は慎重になり、その時点で依頼の失敗はほぼ決まったようなものだ。私達は気を張り詰めて長浜を尾行していた。

「お？ 駅に向かう見たいすね」

「ああ、件のマンションは自宅とは反対方向にある」

長浜は電子マネーカードで改札を抜け、隣の市が終点の電車に乗った。当然、私達もその電車に乗る。しかし、小夜子の面が割れている可能性があるので、長浜とは別の車両に乗り込んだ。一応、長浜が見えるように連結部に近い席を選んで座った。

長浜がマンションに行くならば、終点まで行くはずである。小一時間ほど電車に揺られることとなる。

「小夜子くんはどうして長浜が嫌いだったんだ？」

私は長浜を視界の隅に捉えながら、なんとなくそう問いかけた。

「そうすね……。長浜センセは、『お前はこつだ』って相手のことを勝手に決めつけるんすよね」

「それは大変ウザいな」

「そうすね。更に」

愚痴がヒートアップするほど、小夜子は私に身体を寄せてくる。

ピタリ張り付くようにして「聞いてるすか!？」と憤る。顔なんか唾がかかりそうなほど近い。暑苦しかったが、これはこれで愚痴を聞く先輩と、その後輩とのカップルに見えて周囲になじむやも知れない。それから、小夜子の話しを半分に聞きながら終点まで向かった。

長浜の使用している部屋はマンションの五階だった。角部屋に位置するそこはすでに明かりが灯っていた。愛人が待っているのだろ



う。

「どうするんすか？ 乗り込むんすか？」

小夜子はステップを踏み、今にも駆け出しそうだった。

「小夜子くん、斜め向かえのマンションの一室を今日だけ借りてある。そこで現場を望遠のカメラで押さえる」

ニツと齒の無い笑顔を見せた小夜子は「今の台詞、前半だけ聞くといかがわしいすね」と楽しそうだ。

「無理だ」

「ちょ、ちよつと！！ 無理ってなんすか！ …… って、なんでまたフラレなきゃならないんすか！」

小さく怒鳴る小夜子を無視して、私は向かえのマンションに入って行った。

私の借りた部屋はフローリング六畳のワンルーム。もちろん、今日しか使わないのでカーテン以外の家具は一切無い。その窓から望遠レンズで数倍化した長浜の部屋を覗く。こちらの部屋は電気を点けていない。辺りはすっかり暗くなったので、明るくて下方に位置するあの部屋からであれば、よほどのことがない限りこちらは見えない。

長浜の部屋は、見える範囲ではベッドしか置いていないようだ。

長浜は誰かとそのベッドで会話をしている。誰かは窓枠に隠れて微妙に見えない。

「所長、この部屋ってどうやって借りたんすか？」

「知人は多い方がいい」

小夜子は「なるほど」と呟き、私の隣へ座る。

不動産業からの依頼もあるので、そのついでこうやって一時的に部屋の鍵を借りることがままある。あとは刑事にも知り合いがいる。そういうパイプは作っておいて損はない。どこかできつと役に立つ。シビアな言い方をすれば、ビジネスの信頼とは、相互利益の上に成り立つものだ。相手が骨を折った場合、のちにこちらが骨を折る。逆もしかり。そうやって歯車は回る。

長浜の部屋ではまだ決定的な出来事は起きていない。私は携帯灰皿を取り出し、煙草に火を点ける。深く煙を吸い込み、吐き出すと、気分が落ち着いていくのが分かる。煙草を吸っていなかった時は、どうやって気分を落ち着かせていたのか分からなくなった。今では煙草が無いと死んでしまう。張り込みの場所や状況によっては吸えないこともあるので、吸えるときに吸うのが私の鉄則だった。

「自分にも一本下さいよ」

小夜子はそんなことを言い出す。

「駄目だ」

「そうすか……」

そういえば父親が帰った後にも、小夜子は煙草の話をしてきた。あのときの気落ちした小夜子の顔が、視界の隅でくゆる煙に重なった。

散発的に会話が交わされるなかでも、私は長浜の部屋から目を離さなかった。窓枠で見えなかった誰かを、長浜は不意に抱き寄せた。今まで見えなかった愛人に対し、私は少なからず驚いた。私にはその人物が高校生にしか見えなかった。何故なら制服を着ていたし、成人にしては顔立ちが幼すぎた。しかし、長浜がそういう趣味で着ただけかも知れない。念のため、別の視点でも確認することにした。

「小夜子くん、ちょっと見てくれないか」

私の言葉に頷き、小夜子はカメラを覗きこんで嘆息した。

「ありやいや、こりや教え子すね。あの制服は母校のもんですし、あの子の雰囲気は確実に子供すね。最悪すねアイツ。激写しちやいますか？」

意外に冷静な反応を示す小夜子。探偵になりたい、と息巻くだけあって肝が据わっているようだ。

「ああ、そうだな。適度に撮ってくれ。でも、本番はもっと決定的な場面になってからだな」

「それはつまり……」小夜子の顔がニタリと悪い笑顔に変わる。歯が抜けていて間抜けな表情だった。「本番でことすね？」

「そういうことだ」

小夜子は「自分が見ててもいいですか？」と言ってカメラを放さない。私は「ああ」とだけ言って煙草をふかす。

「しかし所長、これカーテン閉められたら終わりすね」

小夜子はカメラを覗きながらそう言った。

「あの部屋にカーテンがないことは確認済みだったが、念のための保険も用意してある」

「ほほう……。それはどういった？」

「使うときがくれば分かる。盗聴もしているしな」

私は片耳につけた小型のワイヤレスイヤホンを突いた。「悪い友達」に借りた超指向性の集音マイクを使っているのだが、防音対策のされた部屋でないにしろ、思ったよりも感度がよい。これは買いつけてもいいだろう。

小夜子はというと、さすがに驚いたのか口をぽかんと開けて、目蓋をしばたたかせている。

「それ犯罪じゃないんすか？」

「ワカラナイ」

「いきなりカタコトすか！ まあ、いいすよ……」

小夜子は再び長浜の部屋へ向き直る。

煙草はフィルター限界まで火種が迫っている。それを携帯灰皿に放り入れて、またジツポーを鳴らして石を擦る。深く吸い、長く吐いた。

「吸い過ぎすよ所長」と窓の外を見ながら言う小夜子。「でも、実は煙草に火は点いていない」と、楽しそうに付け加えられた。

「ほう、どうして分かるんだ？」

「石を擦ったあとに火のつく音が聞こえなかったんすよ。あとは煙草の匂いもしなかったす」

いい耳と鼻を持っているようだ。これはもしかしたら、なかなか

の拾い物をしたかも知れない。特に匂いに関しては、ずっと吸い続けていたので、いくら非喫煙者といえど普通なら匂いに慣れて分かんなくなっているはずだ。

「やるな。コーヒー豆でも持っていたか？」

「ふふふ、いいえ。犬の鼻ってよく言われていたんすよ。名探偵っぽいですよね」

「小説の読み過ぎだ」と言って、今度は本当に火を点ける。

その後、一時間は経過したのである。さすがに一時間程度の張り込みでは音をあげない小夜子。トイレにも行かず、暖房のない部屋で寒いとも言わず、一時もカメラから眼を離さない。単に面白いから、という可能性もないではない。

小夜子くんはタフだな、などと思っていた私が、イヤホンからの音で顔を上げると、小夜子がプロレス観戦をしているような歓声を控えめに上げる。

「あーっと、始めました！」

私は壁に預けていた背を起こし、窓際に近寄る。確かに男女がうねうねと絡み合っている。私と小夜子は無言でその行為を見つめ続けた。時折、小夜子がシャッターをきる。シャッター音は出ないように改造してあった。

「なんか……こう……、変な……気分になってきたぞ」と小夜子が口走った。

「まだまだ甘いな小夜子くん」

「す、すみません……」

三十分後。

「おお！ 合体した！」と小夜子が嬌声を上げる。まるでロボットアニメでも観ている少年のようだ。

「激写だ」

「了解す」

フラッシュのない無音のシャッターが瞬き続ける。

「顔も写ってた方がいいすよね？」

「当たり前だ」

「ふおお……自分、興奮してきたっす！」

小夜子さんの冷静さにはムラがありすぎるように思ったのだった。

後日。

小夜子は朝早くから事務所の整理、掃除をしていた。先日撮った写真と調査報告書を長浜夫人に突きつけて、「黒です」と言うのは午後からなので丁度よかったと言える。

私は改めて写真を見ていた。プリントアウトした選りすぐりのものだ。

裸の長浜が制服を着た少女に覆いかぶさっている。少女の足には自身の下着ぶら下がっていた。二人とも顔がはっきりと分かる。小夜子は写真の腕がいらしい。

私は写真を封筒にしまうと、机の上に放り投げる。胸糞の悪くなる写真だ。いくつも似たような写真を撮ったが、今回は特別気分が悪い。少女の幼いながら整った顔が、酷く悲しそうに見えたからだろうか。

「悲しいな」

「なにがすか？」

私の呟きを耳ざとく聴きつけた小夜子が問ってくる。

「この写真だよ」

「そうすね……」

ジッポーを乱暴に鳴らすと、私は煙草に点火する。じりい……と先端が赤くなり、胸に煙が吸い込まれていく。長く吐いた煙は、忙しく動いている小夜子の眼差しをきつくさせた。どうやらお怒りのようだ。

「所長！。煙草吸ってる場合じゃないすよ」

「そんなのいつだってそうだろう？」

「なーに真理を得たとか思ってるんすか」と笑う小夜子。

そんなことは思ってもいなかったが、さすがに一人は可哀相なので手伝うことにした。

「これ吸い終わったら手伝う」

「了解す。あ、前から聞こうと思ってたんすけど……」

小夜子が箸の動きを止めて私に向き直った。

「なんだ？」

「なんで煙草吸うんすか？」

私は「うむ」と大仰にうなずいてみせ、煙を吐いて煙草を灰皿に押し付ける。

「格好つけたかった、好奇心だった、最初はみんなそんなものだろう。手放せなくなったときには、理由なんてもうないようなものだよ」

「そうなんすか……」

小夜子は難しい顔をして「自分が思うに、煙草は吸う物じゃなくて、慰めてもらう物なんじゃないかと……」

「……………」

言い得て妙だった。

「どうすか？」

「煙草を吸ったことのない奴が言うな」

小夜子は不満げに髪を揺らす。

「だから吸ってみたいんじゃないすか！ 一本くださいよ！」

「駄目」

「けちんぼ」

「なにを言っても駄目」

「コロンボ」

危つく煙草を渡しそうになった。

そんな私の動揺をよそに、小夜子は作業に戻る。

私とは言えば、コーヒーの粉が切れていたなと思い出し「小夜子くん、そこは後でいいからコーヒーを買って来てくれないか。粉末

の安いやつで構わない」と、お札を取り出してお使いを頼んだ。

「ふんふふーん」

小夜子の耳には全く届いていなかった。届いたのであるが、反応する気がないというのが正解か。

「ちよつと……コーヒーを買いに行ってくる」

仕方なく席を立った私は、そう小夜子に告げた。

「ででつでーん」

今日の小夜子はいつもよりだいぶ耳が遠いようだ。

私はコートをはおり、ドアを開けながら「それ良い歌だよな」と知ったかぶりをした。

「そうすよね！まあ、いま考えたんすけどね！」

「で、ですよね……」

どうやら小夜子くんは雑用を沢山押し付けられてご立腹のようだ。

「すぐに戻って手伝う」

「本当すかあ？」と疑惑の眼差しを向ける小夜子。

「ああ、私は嘘を吐いたことがないんだ」

「なんて見え透いたウソ吐くんすか……」

私は居たたまれなくなつて街に飛び出した。

向かったのは近くのコンビニだ。事務所の通りを真っ直ぐに行き、最初の角を曲がれば、誰でも知っている名前のコンビニがある。

私は小夜子の機嫌をとろうと、甘い物も買って行くことにした。

コーヒーの粉とプリンを手にレジへ向かうと、化粧品コーナーを見つめている制服姿の少女がいた。学校はどうしたのだろう、と余計な心配がよぎる。

私はレジへ向かうのを止め、雑誌コーナーに立って少女を観察した。少女は明らかに挙動不審だった。肩口まである栗色の髪をいじりながら、大きな瞳をちらちらと店員に向けている。おまけに、つま先で床をつついたりしている。

下手くそだな、と私は思った。

コーヒーの粉とプリンを持ったまま、私は少女に近づいた。まさ

に化粧品を鞆に入れようとしている瞬間だった。

「下手だな」

少女は驚愕の表情で私を見る。見つかるとは思ってもみなかった、という感じだ。慌てて化粧品を棚に戻す。

「……まったく」

「なんだよ？」

化粧品を戻したことで余裕を取り戻したのか、少女は私を睨みつけてくる。

「コンビニで万引きとは、あまり賢い選択とは言えないな」

「オッサンには関係ないだろ」

オッサンという言葉に激しく落ち込んだが、顔に出さないよう必死に堪えた。

「そうだな。……確かに関係ない」

「じゃあどっか行けよ！」

「金がないのか？」

「え？ あるけど……」

私の有無をいわさぬ物言いで、少女は反射的に返答した。

「長浜に貰っているのか？」

さらに今の言葉で追い討ちを受け、目に見えて動揺し始める少女。どうして私はこの少女に関わろうとしているのだろう。ただの調査対象の愛人だ。少しばかり若過ぎるが。

「なんでアンタが知ってんだよ！」

「あまり大きな声を出すと大変だぞ」という意味を込めて、私は店員のほうへ視線のみを動かした。

事実、店員は私達を気にし始めている。このコンビニにはもう来られないかも知れない。

少女は押し黙ってうつむいた。あの写真の悲しげな顔が脳裏をよぎる。

私は名刺の裏に携帯電話番号を書いて差し出す。

「なにかあったら連絡するといい」



一体なにがあると言うのか。私は自分の行動がよく分からなかった。ただの気紛れに過ぎないのかも知れない。

予定にない調査対象の愛人との接触。私は探偵として三流だと痛感した。少女はそんな私から名刺を引つたくると足早に去って行った。

私は会計を済ませ、事務所へと戻った。

「随分と長かったすね」

小夜子が湿気が多い瞳で睨んできた。

「ん？ ああ、ちよつとな……」

私は買い物袋を新しく搬入されたテーブルに置く。

「なんすか、その気の無い返……ん？ なんか女の匂いにするぞ」

小夜子は鼻をクンクンさせて近寄ってくる。

「所長……女の人と会いましたね？」

「鋭いな」

さすが犬の鼻だと思い、苦笑するほかない。

「誰すか？」

「気にするな」

「なんすか……また謎臭いすね。尾行しちゃうぞ？」

私は買い物袋からプリンを取り出す。上にクリームがのっけていてカロリーが殺人級の代物だ。

「お土産」

小夜子はジメジメした瞳でプリンを受け取る。

「甘い物を与えれば女は喜ぶとでも思ってるんすか？」とふくれっ面で言いながらも、嬉しそうにプリンの蓋を開ける小夜子。

「喜んでいんじゃないか」

「喜んでますよー!!」

「……………へ？」

小夜子は言い間違えたのか、本気で肯定したのか、よく分からな

い返答をくれた。

私は小夜子の代わりに事務所の整理を始め、十分後にはプリンを食べ終えた小夜子も加わって、午前中に全て片付いたのだった。

「結果は……端的に言いますと、黒です」

私が写真と共にそう告げると、喪服のような黒いスーツ姿の長浜夫人が「そうでしたか……」と声を詰まらせる。それは悲しんでいると言つよりも、なにかを算段しているような印象があつた。写真を見て驚かないあたりすでに事情を知つていたような気もする。他の人は写真にすら汚らわしくて触れようとはしない。しかし、長浜夫人は吟味するように写真を手に取っている。黒いスーツも相まって、長浜夫妻は真つ黒な夫婦だな、なんて思うものの口には出さない。当たり前だが。

長浜洋介と同一年の夫人は、年齢よりはだいぶ若く見え、綺麗に化粧された顔はマネキンめいて見える。泣きも怒りもしないものだから余計だ。

小夜子はコーヒーを二つ用意してから、私の後ろに立って動かない。きつと、あの千里眼を会得しようとしているような視線を突きつけているのだろう。

「あんな男は別れるのが正解ですよマジで！死ねばいいのに！」なんてことは言わずに、「よく話し合われてください……」と当たり前障りのないことを言った。向こうから相談がない限り、この台詞が正解である。

私の言葉に長浜夫人は頭を縦に振る。

「はい。ここからは自分でなんとかします。ありがとうございます  
た」

長浜夫人は料金を支払うとすぐに事務所を去った。

「なんか怪しいすね、あの人」

長浜夫人が手をつけなかったコーヒを啜りながら、小夜子は納得のいかない顔で言った。

「ああ、まず間違いなくなにか企んでいるな」

浮気されるくらいならば有利な条件でさっさと離婚したい、と言う者も多いくらいだ。それを思うと、長浜夫人の淡泊さは不気味としか言いようがない。

「長浜センスを強請るゆす気じゃないすかね？」

と小夜子が言うようなことも十分あり得る。

「それはいい線をいつている」と同意して、私はジッポーを鳴らした。

「じゃあ」

「だが私が受けたのはあくまで浮気調査だ。これ以上深入りする義務も権利も無い」

小夜子の言葉を遮り、私は一息に常套句を並べた。それと同時にあの少女を思い出して気分が落ち着かなくなったが、煙草をふかしてどうにか冷静さを保つ。

「んー……：気にならないすか？」

「それは小夜子くんが長浜洋介と知り合いだからだろう」

「でもでも、痴情のもつれから殺人事件へと発展……！　もしそうなったら所長の出番すね！」

「警察の出番だ」

「その時は自分も力を貸しますね！」

相変わらず人の話しを聞かない小夜子は今日も元気だった。

「小夜子くんは人の話しを聞くところから始めないとな」

「ん？　あんすか？」

小夜子はお茶請けの菓子をかじっていた。

「ダメだなこいつ……」

「誰がメス豚すか！！」

そこまで言っていないし、意味もズレている気がする。そもそも聞きまちがいようがない。しかし悪口はきちんと聞こえているらし

い。そういえば、聞いていないようで聞いている、という特技を持つていたなと思ひ出す。

小夜子は頭から湯気を上げそんな漫画的な怒り方で、空のコーヒ―カップを持つて給湯室に消えて行った。

私の携帯電話が着信したのはそんな時だった。

「……………」

知らない番号だったのだが、私はある予感をもって無言で通話を開始した。普通ならば事務所の電話が鳴るはずである。やや戸惑う声があつてから、『探偵さん?』と声が聞こえてきた。

「ああ、そうだ。」

そうか……………」

ああ

分かった。

あの図書館の近くだな? ああ、では

通話を終わると、いつの間にか小夜子が私の近くに立っていた。

「女すか?」とジトジトした目で座る私を見下ろしてくる。やたら絡んでくる小夜子に違和感を感じた。

「小夜子くんには関係のないことだ」

小夜子は「ふ〜ん……………そすか」と言つてソファに座る。「いまの

所長の顔、あんま萌えないす」

「どつという意味だ?」

「所長には関係ないことす」

ムスツと言ひ返す小夜子はどうやらいじけているようだ。しかし、そんな小夜子を巻き込む訳にもいかない。なんせ、私ですら何故こついった行動にでていいのか分からないのだから。

少女が私を呼ぶ。

悲しげな瞳で、悲しげな顔で、泣き腫らした目蓋で、悲鳴でかすれた声で、私を呼ぶ。

私は答えられない。

そこにあるのは少女の肢体。ボロ雑巾のような死体。忘れられな

い温度。

僕を呼ぶ。

応えられない。どうして？ 僕だけ時を進めているからか？

これは夢だと気付いている。しかし、覆せない現実でもある。

その中で私は再び誓う。

酷い焦燥が私を襲う。

「お前のせいじゃないのよ」

「……………はあ」

私は浅い眠りから目覚め、小さな舌打ちへ溜息を重ねた。額に冷たい汗がびっしりと浮かんでいる。「夢だ。これは夢だ。分かってるんだ」 咳き私は、汗を拭って煙草を灯す。

小夜子が帰宅してから、私は事務所に一人残っていた。特に仕事があつた訳でもない。一度帰宅してしまつと、そこからはプライベートだ。私はこれから起こす行動をプライベートにしたくなかつたのだから。そんな自己分析もなんだか虚しく空振る。

21時45分。

この小さなオフィス街を窓から見下ろすと、帰宅中であろうサラリーマン達が身体を引きずるように歩いている。彼らには彼らが主役の世界が存在して、私の知らない世界が動いている。その知らない世界が数十億もあり、幾重にも交わっている。それらを全て把握する術は私には無い。それが馬鹿に薄気味悪く感じる夜だった。

私は事務所を出ると、煙草の煙とも吐息ともつかない白さを、夜空に散らしながら目的地へと向かった。

15分ほど歩いただろう。取り繕うように生い茂った樹木と、真新しいベンチのみが存在する公園に辿り着いた。

昼間の電話の主は、すぐには見つからなかった。気配のする方へ眼を凝らしてみると、外灯の届かないわだかまった暗闇の中で、少女が私に気付いて顔を上げた。

「待ったか？」

思ったよりかすれた声が出て、私は少し怯んだのだった。

次話へつづく

## 2・探偵は少女で夢をみる（後書き）

最後まで読んでくださった皆様へ。  
ありがとうございます。

次話は小夜子の過去話になります。  
宜しければ、またお越しく下さい。

### 3・乙女の秘密

コンビニから帰った所長は、ずっと浮かない顔をしていた。まあ、お客さんが来たとき以外はだいたい湿っぽい顔をしているんだけど、いつにも増して酷い気がした。私はまだ未熟だし気も利かない。だけど、気落ちしていることくらいは分かるし、少しでも助けになりたかった。

原因はコンビニで、もしくは行き帰りで会った女の人だと思う。私が給湯室へ行っているあいだに電話していたのも、たぶん同じ人だ。所長は険しい顔をして、私の接近にも気付かなかった。人の気配に敏感な、この所長が、だ。

だから私はたずねた。

「女すか？」

怒ったような口調になってしまったけど、ホントに怒っていたんだから仕方ない。所長の元気を奪ったのはどのどいつだ……？ さつき電話してきた女なのか……と。

所長は「小夜子くんには関係のないことだ」と、私を突っぱねた。所長はポーカーフェイスが得意だ。営業スマイルだって得意で、仕事るときは別人のようになる。長浜夫人への対応も、哀愁ただよう微笑と、沈痛な面持ちをうまく使い分けていてビックリした。詐欺じゃないか……と思ったのは秘密です。

それが今はどうだ。眉根を険しくよせ、伏目がちに古い書類を眺めている。読んではいけない、心ここに在らずだ。それどころか、煙草を反対にくわえてみたり、それに気付かず火を点けて瞠目とらもくしてみたりと、おかしな挙動ばかりだ。私の皮肉にちよつと動揺する、いつもの可愛らしさの欠片も見あたらない。

たまりかねて私は、拳を握って立ち上がった。

「所長」

「小夜子くん、今日はあがっていい」



私の声など聞こえていなかったみたいで、いきなり遮られた言葉は氣勢を失った。握り締めた拳の力は、いくばくか私の右側で揺れ、果たしてゆき場所を失った。

「そ、そすか……………大丈夫なんすか？」

「ああ、今日はもうやることはない。帰っていいぞ」

「そういう意味じゃないんすよ！」という爆発的なものは、なんでもだか私の中で圧殺され、「お疲れ様でした……………」と嫌になるくらいのもふて腐れた声が出た。口までとがっついて、自分でも少しビククリした。

私は事務所のドアを閉め、薄暗い廊下を歩いた。じりりじりり……………と明滅をくり返す蛍光灯は、まさしく私の胸で瞬またくイライラとした感情そのものだ。

あの古びた書類。いつもカギのかかった引き出しにしまっており、思い出したように取り出して眺めている所長。

そうだ。眺めている。所長は読んでいない。文字を目で追ってすらいらない。何度も読んで手に馴染み、もう読む必要すらなく、それでも手に取らずにはいられない。例えば運転免許証のようなものかそこに書いてある文字なんて読まなくとも、たびたびの更新を欠かさなければ、立派な証明書になる。

所長はいつたい、なにを証明しようというんだらう。

所長が探偵になった理由と保管してある古い書類。所長の険しい顔を媒介にして、この二つが私の頭の中で曖昧な繋がりをみせた。言動、行動、状況、空気などのピースが、白い光の線で結ばれてゆく。これだ、という予感。理路整然とした説明なんてできない。それどころか言葉にすらならない。それでも、これが正解だという予感。脳みそが冴えている証拠だ。

私は思考を巡らせつつ事務所ビルの階段を下りた。ラスト一段を強く踏みしめて、自宅へと向かった。

「お前、探偵にはなれないな」

美術教師が私の絵を見て、なんの前置きもなくそう言った。正直、絵の評価とは思えず、なんなのかさっぱり分からなかった。不意打ちだったのもあって、私の目蓋はシパシパと大げさな目弾めじりきをした。

「ん……………ん？ どういう意味ですか？」

「そのままの意味だよ。お前は探偵になれない」

変わり者で有名な美術教師は同じことをくり返した。

なんなんだ？

そう思ったとき、私の中で火花が散ったように感じた。溶接などの職人が放つ火花ではなく、粗暴に打ちつけられた鉄骨が、コンクリートとの衝突と摩擦で吐き出す粗野な火花。むかし父親と観たアクション映画を断片的に思い出した。

「そうなんすか。んむ……………まあ、自分、探偵なんて興味ないすから」と、私は美術教師の言葉を軽く流して、深く考えることはしなかった。

美術教師はそんな私に何を言うでもなく、次の生徒の絵を見に行ってしまった。

嫌な感じだった。

教師の言葉や態度が、ではない。自分の背中を駆け上がり、まるで髪の毛を逆立てようとしているような、そんな何かがだ。なんだろうこれは。

ざりり……………！ざりり……………！と、また火花が散った。

私は自分の描いた絵を眺めてみる。花瓶に立ててある花の絵。上手くもないが下手でもない。我ながら普通の、一般高校生が情性で描いたレベルの絵だった。

「自分の絵、なんかおかしいですか？」

私は隣に座っていた、話し慣れない女生徒に聞いてみる。自分では気付いていない何かがあるのかも知れない。

「え？ 別に……………普通じゃない？」

「そうすよね……」

ちなみに、その女生徒の絵も普通だった。

そんな会話をしていたが、私はすでに美術教師の言葉なんて片隅に追いやってしまっていた。それよりもあの火花はなんのか。その正体が判然としなくて、私は少しイラついた。イラついている、と自覚した自分にビツクリした。

昼休みになり、私は屋上に足を向けた。イライラを刻み込むように階段を踏みつけて上った。いつもなら、友達と教室でお弁当を開いてるはずだ。でも、でも今日の私は少しおかしい。美術の時間に感じた苛立ちが頭を支配していて、これじゃ友達に迷惑をかけてしまうと思い、季節がら人の少ない屋上へ行くことにしたんだ。

予想どおり数人の生徒がいるだけだった。髪の毛を染めたガラの悪い男女数人が、私を見て薄ら笑いをうかべている。それを努めて無視し、私はお弁当を持ってフラフラとフェンスに近づいた。

フェンス越しにグラウンドを見下ろしてみる。何もこみ上げてくるものはない。親の勧めで入学した高校の、だっ広いグラウンドがあるだけ。せいぜいが高いな、広いな、という平凡な感想しか出てこない。

「ぢぢぢりりッ……」と、またしても火花が散る。

私はこんなおつぺりとしたグラウンドを見下ろすために、美術教師に意味の分からない台詞をぶつけられるために、毎日1時間もかけて通学していたのか……？

奥歯を力いっぱい噛みしめてみても、空が、雲が、風が、太陽が、フェンスが、足元のコンクリートさえも、私を馬鹿にして笑っている。そんなはずなのに、そう思わずにはいられない。そんな自分に、より一層イライラがつのる。

ホントに、なんなんだよ。

その時点で、こんな苛立ちを呼び起こした美術教師に『大嫌いだ』というレッテルを貼った。

私は空腹が苛立ちを加速させているんだと、とりあえずお弁当を

食べることにした。コンクリの上に腰をおろしてお弁当を開くと、母親に習った通りの料理が並んでいる。昨日の晩の残りど、今朝作ったものだ。綺麗に、美味しそうに出来ている。

ぢりぢりぢりツとまた火花。

「なんだよもう！」

苛立ちが怒りに変わる。

私はお弁当を反対側のフェンスに投げつけた。当然、お弁当はぐしゃぐしゃになり、食べ物ではなくなった。怒りの残骸。

ぢ、ぢりツと火花が瞬<sup>またた</sup>いた。いま気付いたことだけど、その火花は青い色をしている感じだった。もう少しで、なんなのか解るよくな気がした。

私はグロテスクになったお弁当を横目に、午後の授業に向かった。怒鳴り声が聞こえた気がしたんだけど、そんなことは些事だ。

正直、そのあとの授業の内容など全く頭に入っていない。今までは真面目に話を聞いて、理解できなかったら質問して、ノートを写して、復習して、予習して……。

暗闇で散発的に跳ねる火花は、青白い光を増してきていた。明日になれば、治まっているかも知れないと、私は怒りを賢明に抑えて時を過ごした。

授業の終わりを告げるチャイムさえ苛立たしく感じる。そんなことは初めてだった。友達との会話もおざなりに、私は逃げるように自宅へ急いだ。筋トレして、お風呂に入って、布団にもぐれば、きつとよくなる。弓道をやっていたときもそうだった。辛いこと、嫌なことがあっても、筋トレして、矢をそえて弓を構えれば、もう邪念は消え去ってしまう。だから急いで。

前のめりになっていた気持ち、足元に転がってきた残骸に押しとどめられた。怒りの残骸。私が投げた捨てたはずの弁当箱。

私はそれを軽い動作で跳び越えると、ゆっくり脚の回転を停止させた。

「お前、ちょっとこっち来い」

どこから出てきたのか、髪の毛を染めた男子が私を呼びつける。知り合いではない、話したこともない。弁当箱が気になったけど、とりあえず帰ることが今の最重要事項なんだ。だから私は弁当箱を拾って、また帰路を急いだ。

「この……！ こつち来いっつってんだ！！」

怒声に思わず顔を上げた先にいた別の男子。横から私の首を腕で押さえつけた。溺れた人を救助するあの姿勢だ。雰囲気は真逆だけど。

「な……ぐえ……、なんなんすか！？」

バタつく脚を女子二人が掴み、私はあつという間に路地へ引きずり込まれた。怖くない、とは思わない。帰らなければ、というのも重要ではなくなった。それよりも、ずっとずっと気になることがあった。

この人たちはイライラして、限度を超えて怒っている。四人とも怒っている。

私も怒っている。イライラして、なんなんだか解らなくて、すごい怒っている。

怒りは当然の感情。イライラしてもいい。反抗したって構わない。そうなのかな？

そうなんだよ。だって五人も人間がいて、全員が怒りに身を任せてんじゃないかよ。そうだよ。なんだか解らなくても、頭にきたら怒っていいんじゃないか！

「おい……こいつ、なんかおかしくねえか？」

「まあ、背高すぎだよな」

「脚もどんだけ長いんだっての……ムカつくわー」

「そういうことじゃねえよ……なんか笑　ってオイイ！」

私のパンチは空振りに終わった。無理な体勢からだっだし、当たるとは思っていなかった。とりあえず首から腕を外してくれた、それで目的は達成できた。

「この女あー！」

男子の一人が大振りのパンチを放った。弓道で培った目は衰えていない。パンチ、という表現で合ってるよね？ 少なくとも正拳突きではないよね、なんてことを考える余裕もあった。

はずなんだけど、一発目を避けたあと、その先で待ち構えていた男子に脚を払われた。私は仰向けで宙に浮きながら、そうかケンカは試合じゃないんだ。ましてや一対一でもない、そう思い至る。

身体の筋を痛めることを覚悟して、私は急激な横スクロールで無理やりに着地。私を払った脚をすぐさま掴んで、壁に自分ごとそいつを叩きつけた。私の頭がそいつの顔面へ派手に衝突。これは頭突きというのかな。

「お……お前、な、なに……！」

最初にパンチしてきた奴が何かを言い終わる前に、私は声の位置からして、さっきの場所から動いてないと予想した。だから私の壁（鼻血を流している男）を押し、勢いのついたキックは見事に相手へ激突。予想外だったのは、左足でキックするはずが、勢い余って一回転してしまったこと。つまり右足かかとの回し蹴りが、相手の鎖骨に当たった。あと、自分の頭と足もすごい痛い。

勢いよくぶつけ、ぶつけられているんだから、自分も相手もそりや痛いよな。もし同じ痛みなら割に合わない、というか不毛だ。

そうかケンカは割りに合わないんだな、と思い至ったときには女子二人が消えていた。ほんの数秒間の立ち回りだったけど、これまでに覚えのない濃厚な感覚に満ちた、そんな数秒間だった。

余韻が去り、我に返った。血とうめき声に沈んでいる男子が二人。それを見下ろしている私。完全に私が悪党みたいだった。

「ヤ、ヤバーいす……」

私は警察署にいた。

留置所とか、取調室とか、小説かドラマみたいな場所に連れて行

かれるんだと思っただけ、普通の会議室に通された。手錠もかけられてなくて、女性警官さんが緑茶まで出してくれた。予想外に話もきちんと聴いてくれた。てつきり、問答無用で眩しいライトを当てられるんだと思っただけ。まあ、少年課の刑事さんには「やり過ぎだろ…お前」とすごく怒られたけど。

私の処遇については、自首(?)してきたことと、怪我人のために救急車を呼んだこと、そして事は向こうから起こしたこと、等々により温情を受けた。

男子二人は病院に運ばれ、手当てを受けているようだった。重症ではないけれど、軽症でもないみたい。私の頭もかかとも、じんじんと痛むので、彼らはもつと痛いだろうな、とちよつと落ち込んだ。彼らの親御さんが、学校や然るべき機関に訴えたりしたら、私の高校生活は台無しだろう。でも、まあ、なんというか…：…そうなたらそうなたで、その現状で精一杯やれることをやればいいのか、なんて、少し開き直りに似た爽やかな思考が巡っていた。

今は父親が引き取りに来るのを待っている。品行方正であつたらしい私が、初めて門限を破り、あるうことか暴力沙汰を起こして補導。父親は腰を抜かし、母親は襲撃者の家に殴り込む準備を淡々と始めたらしい。どうやら肝が据わっているのは、普段は物静かな母さんのほうみたい。

私が刑事さんに無料でカツ丼は出さない、と教わってビックリしている、父親が到着した。

「カツ丼って、無料じゃないんだって…」

私は元気であることをアピールしたが、父親は大きく溜息を吐いた。溜息の重さで床が沈んだらどうしよ、と思うくらい大きな溜息だった。

「小夜子…」

私はこんな小さい父さんを見たことがない。実際の質量はすごいんだけど、岩石みたいなんだけど、そうじゃくて。『しゅん、となる』という表現を本なんかでたまに見かけるけど、あれは本当に『

しゅん』なんだな、と思った。

父さんは近くまで来ると、私の顔付近まで手を持ち上げた。一瞬、叩かれるんだと思って身体に力を入れたけど、父さんの手は私の頭にのつた。でっかい手だった。あっつい手だった。ゴワゴワした手でグリグリするから痛かったけど、自分が安心していくのが分かった。

「一まず怪我がなくてよかった……。襲ってきた連中は許せんが……。まあ、お前が返り討ちにしたから良しとしよう」

母さんも重装備で出かけたしなあ、と苦笑する父さんの目。優しい笑顔で父さんは笑っている。父さんはこんなに優しい目をしていたんだなあ、なーんて、今頃になって気が付く。今度からもっと周りを見なくては駄目だ。大事なことを見失わないように……。

「小夜子は母さんに似たんだなあ……」

なんと反応していいやら、妙なことを父さんはつぶやいた。

「とりあえず、背が高いのは父さんに似たよ。母さんはちっちゃいし」

私はそう言って笑った。

そして、色々な手続きを済ませ、私と父さんは帰路に着いた。

帰り道、襲撃者である男子生徒の家に殴り込んだ母さんから連絡があった。相手方は「よくやってくれた！あのクソガキ共にはいい灸になったろうよ！」と、ずいぶんと豪快な人たちだったらしい。だから、私はお咎めなしであるはずだったんだけど……。

「弁当箱？」

電話中の父さんから、そんな怪訝そうな声が聞こえた。

私の顔から血の気が引いていった。お弁当を捨てたことがバレたんだらうか。戦々恐々と、でっかい父親を見上げる。

「小夜子お……」

「ちよっと待って！それには訳がぶッ……」

私の言葉なんて届かなかった。あの男子生徒たちなど足元にも及



ばない、速度と重量を持った父さんのパンチを左頬に受けた。私は地面をもんどりうちながら理解した。あの胸の火花を。そうだったんだ、これは。くそオヤジが！！

後日、解ったことが三つあった。

私は、胸に生じ始めた火花の正体を理解した。それは『反抗』という名だった。青白くきらめいていた火花は、私に眠っていた燃料に引火し、青い炎に変わった。音を立てて燃える青い感情。ようやく私は、私自身を手に入れた気がした。

そして二つ目。

警察署からの帰り道、父さんは私を殴った。あの父親はすぐ殴る。私になにか凶らずも悪さをしてしまった場合、言い訳する間もなくパンチされる。そして、よくよく考えると、自分が悪いことしたんだと気付かされる。口で言ってくればいいのに、いきなりパンチするとか実に父さんらしい。傷痕が残らないあたり手加減。というか特殊なパンチ(？)なのかも知れない。

つまり私は、何かしら悪さをしてかした可能性が高い。最初はお弁当を捨てたことかと思っただけど、どうも違うような気がした。特に怒られるのは、人様に迷惑をかけてしまったときだ。もちろん父親が全て正しいということもない。今の私ならそれがよく分かる。でも、あのパンチには確かな正論を感じた。

だから私は色々調べた結果、再び屋上へ来た。あの襲撃に参加していた女生徒に会って話をしたかったから。また屋上にくるとは限らなかつたけど、他の用事もあつたし、私は屋上で彼女を待った。やがてやって来た彼女は、私を見るなり青くなつた。「ッ！声にならない悲鳴を上げながら、彼女は慌てて逃げようとして転んだ。」

「ダイジョブすか？」

私は彼女に手を差し出し、なるべく優しく声をかけた。彼女の瞳は、怯えの色から怒りへ、そして虚勢の色へと移ろいだ。私の手を払い、彼女は立ち上がった。

「お前、自分が最初に手を出したんだって分かってんの？」  
「へ？」

衝撃的な事実には、私は呆けてしまった。

私が投げた弁当箱は彼女たちの近くに転がり、中身が飛んできたという話だった。己がいかにも周りを見ていなかったか、『洞察力』の足りなさを痛感した。足りない、というレベルではないかも知れないが。

とにかく、私は三つ指をつき、額がコンクリで擦れるほど謝った。我ながら凄まじい土下座だったと思う。他の三人にも謝りに行こう。殴られても、父さんのパンチよりは効かないはずだし。

「ごめんなさいー！」

私の土下座に、彼女が身じろぎしている雰囲気伝わってきた。

私は声のポリウムを更に上げて謝る。

「ごめんなさ」

「かつこいい……」

「へ？」

再び私は呆けることとなった。全力で土下座している私を見下ろし、彼女は何故だか格好良いという。

「ゆ、許すからさ、あの……」

彼女は言いにくそうに口ごもる。瞳の色は恥じらいに変わった。一体なんだというんだろう。

「許すから……さ。と、と……友達になりませんか!!」

謝罪する私の声よりも大きな、好意の大音声だった。彼女は目をつむり、顔を真っ赤にして右手を差し出している。それはなんだか違う気もしたんだけど、私は苦笑いを浮かべてその右手を掴んだ。

栗色のポブヘアが似合う新しい友達ができた。本名は別にあるんだけど、私は彼女を『栗子』と呼ぶことにした。栗子は「なんだよ

それ」、と少し不服そうだったけど、とても楽しそうだったから問題ないんだと思う。

「あんな綺麗な土下座なんて初めて見たよ」

「そ、そうすか。あは……はは」

苦笑いの私へ、栗子は照れくさそうな笑顔を寄こして屋上を後にした。

そうして、私はすっきりとした気持ちで眺めていた空から、視線を地上へ転じた。屋上のフェンス越しに眺めたグラウンドはすごく熱い。放課後の部活にいそしむ生徒の熱気で、陽炎でも見えそうなくらいだ。まだ夏には早いのに、太陽だって応援していた。私の髪をなでる風も、もう少し彼らに涼しさを届けてあげたらどうだろう。不意に屋上のドアが鳴った。それは誰かが屋上へ来た証だ。

振り返った私の前に、三つ目の答えを提出すべき男が現れた。光の射し込まないカビ臭い階段への扉が、不気味な鳴き声で閉じられた。

「いい天気だな」

のん気なことを言うこの美術教師が、放課後の屋上で絵を描くことがある、それは調査済みだった。問題は不定期だということ、私は四日間連続で屋上へ足を運んでいた。そして、三日間連続で夕暮れを眺めて帰ったことになる。

「長浜センセ」

私は待つてましたと睨みつけた。

「……なんだ？」

長浜というその美術教師は、困った笑いをみせながら私に近づいてきた。中性的なようっていて、眉毛がぶつとい、なんだかちぐはぐな顔。

「解ったすよ。センセが自分に、探偵にはなれないって言った意味」  
「さあ、そんなこと言ったかな」

薄く笑う長浜の顔は、完全に憶えている顔だった。

「見比べてみたんすよ。自分の絵と、隣の子の絵。正直、その子の

絵も巧いとは思えなかったですが、センスに探偵うんぬん言われたのは自分だけだった」

「なるほど。それで……その心は？」

余裕ぶっている長浜が気に食わない。私の中で、あの青い炎が勢いを増した。燃料は底知らずで、いつまでも燃えてくれそうだった。

「自分の絵には模様がなかった」

「……………」

長浜は無言で続きをうながした。

「自分は昔から、話を聞いていないとか、視野が狭いとか、そういう風に言われてたんすよ。ん、まあ……実際そうなんすけど……なんていうか、花瓶に立ててある花を描け、と言われたら花をメインにしちゃって、他のもの　花瓶とかはあまり見えなくなっちゃうんすよ。だから、花瓶の模様を描いてなかったんす」

私は言いながら、恥ずかしさのあまり頭をかきむしりたくなった。「そうだな。視野が狭く、洞察力もない。集中力だけはムダにあるようだがな」

「む……………。だからって、探偵に例えることないじゃないすか。分かりにくいすよ」

長浜はイーゼルを立てながら、「それくらいも分からなかったら、探偵なんて無理ってことだよ」と腹の立つ笑みを貼りつけて言った。「どうすか？」

私は負けじと不敵な笑みを浮かべ、長浜から視線をそらさない。

「……………なにがだ？」

「自分、探偵になれるすか？」

「無理だな」

長浜は即答した。

思わず握った私の拳を、「殴らないでくれよ」と指差す長浜。それでも、爪が食い込むほどに私は拳を握る。それは私の意志だ。固い意志。私の両側で行き場所を探して震える。

「く……なんですか！？　なんで探偵ダメなんですか！？」

長浜はキャンバスをコンコンと叩いた。

「どうして君は三日間も待ちぼうけていたんだと思う？」

愕然として声も出せない私を見て、長浜は憎たらしい笑顔でどめを刺す。

「そのフェンス側、職員室から丸見えだよ」

「……………」

こいつは嫌いだ。やっぱり嫌いだ。大嫌いじゃ足りない。超嫌いだ……！

「お、おいおい。暴力はダメだぞ」

長浜が少し怯んだ私の両拳、それを天に届けと振り上げた。ぶうん……と風を切る音と共に、少し足も浮いた。

「ぜつつつたい探偵になる……！」

その大音声によって、気焰きえんを上げて燃えさかる反抗という名の炎。

将来は探偵になる。

両親など、周りの消火活動をモノともせず、未だその炎は燃え続けている。

私が所長の事務所に入った経緯とかは、また別の話。

所長は「いまが反抗期か」と言ったが、厳密には違う。あの時から私は、ずつとずつと反抗期。

「なにがあつたんすか、所長……」

私のつぶやきは、秋の寒風にかき消された。

次話へつづく

### 3・乙女の秘密（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございます！

次話から時間軸が戻って、所長と小夜子の奔走が再び始まります。  
お時間がありましたら、ぜひまたお越しください。

#### 4・HOPE

公園に外灯は一つきり。広さは目測でおよそ100メートル四方。暗闇と静寂に覆われ、茂っている樹木は音も立てずに私と少女を見つめている。ざわざわと、風もないのにざわざわと。私の胸中はざわめいている。

「ホントに来た……」

私を確認するなり少女はつぶやいた。沈んでいくせによく通るその声は、夜に聞く鳥の鳴き声にも似た不気味さがある。

「何かあったのか？」

どうして私はこの少女に関わっているのだろう。その疑問が頭の隅で明滅している。いや、もう分かっている。ぼんやりと理解できている。しかし、それを言葉にするのは難しく、上手にまとめることができない。反射や感情に近いものなのだろう。

「さあ……、分かんない」と投げやりに嘆息する少女。明かりの届かないベンチに座っていて、表情は読み取りにくかった。

私はベンチには座らず、少女の傍らに立ったままジッポーを鳴らす。澄んだ音色は辺りへ存外に響き、少し居心地の悪さを感じた。

「一本ちょうだい」

少女の台詞に、小夜子の屈託のない顔が思い浮かぶ。

「駄目だ」私は煙と共に吐き出す。

「洋介はくれるんだけどな……」

長浜のことだろう。

「駄目な大人だな」

「探偵のオジサンさんは、駄目な大人じゃないんだ？」

「長浜とは違う駄目な大人だ」

少女は「意味わかんねー」と少し笑ったようだ。

「長浜とは……いつから？」

少女は少し身じろぎする。



どうして私が呼ばれたのかは分からないが、私とこの少女の共通点はそれだけだ。

「あー、たしか……高1の時から……」

私は苦々しく煙を吐き出す。暗くて、煙がほとんど見えない。ひどく煙草が不味かった。頭の中で、サブリミナルようにさっきの夢がフラッシュバックする。

私の名前を呼ぶ夢の少女。現在、傍らにたたずむ少女とは似ても似つかない。全くの別人だ。しかし、

「洋介は他の先生とは違って、怒らないし、話も面白いし。半分くらい意味分かんないんだけどさ。なんか良い兄ちゃんみたいで、だんだん仲が良くなって……。最初は単なる冗談のつもりで持ちかけたんだけど、いつのまにかお金も貰うようになって……。は、はは」

夢の中の少女と、目の前の少女が重なり合う。背格好も、髪型も、顔立ちも、まるで違うのに、ある一点で共通し　重なる。悲しげに、寂しげに、微笑んでいる。

本当に……本当に見たくない。そんな顔で微笑んで欲しくない。見透かせる気丈な笑顔など、あの時　見たくなかった。

「……………長浜の話をしているお前、楽しくはなさそうだ」

少女を見るたび、声を聞くたびに、せり上がってくる焦燥感を私は努めて抑え込んだ。

「あー……どうだろ。分っかんね……はあ」と、またしても溜息多めに少女はつぶやいた。

それが割に合うのか、合わないのか、人によるのだろうか、普通のバイトよりはいい稼ぎになるのだろうか。金銭が目的であるかどうかも人によるのだろうか……。援助交際は下火と思いきや、恒常的になってきているという話も聞く。下火だと思われるのは、あまり大きく騒がれなくなったからだろう。良くも悪くも、慣れとは恐ろしいものである。

「少なくとも、私には楽しそうに見えなかった。……それでも、まだ続けていくのか？」

「……………」

少女は黙ってうつむく。

私は何がしたいのだろうか。私はこの少女に何を求め、この少女は私に何を求めているのか。焦燥感と、それをどうしようも出来ないイライラが、私を追い立てる。短くなつた煙草の先端、オレンジの灯りが指に迫りつつある。

「探偵のオジサン……、私としない？」

少女の見え透いた気丈な笑顔が、私に向けられた。

そして、私の視界を火花が舞つた。思わず煙草のフィルタを強く噛んでしまつたらしく、指を支点としてフィルタと煙草が分離してしまつた。私は携帯灰皿にそれらを放り込んだ。窒息効果で消える火種のように、私の焦燥と、少女の言葉も消えてしまえと、願わずにはいられない。『少女は性的に未熟でも無垢でも決してない』、という誰かの言葉を思い出し、頭に血が上りつつあつた。

「いくらだ？」

ノイズ交じりの脳内に、サブリミナルで夢の少女が現れる。明かりに背を向けていてよかつた。暗がりにも目が慣れても、逆光ならば私の苦い表情は読み取れない。

「はは……やる気まんまんかよ。安くしとく？」

驚いたように、もしくは呆れたように、眉を上げて自嘲ぎみの笑みを浮かべた少女。ざわざわと、風もないのにざわざわと。

「勘違いをするな。お前が、私にいくら支払うんだ？ と、聞いている」

私の返答を、少女は予想もしていなかったのだろう、しばし微動だにせず呆け、出てきた言葉は「……………は？」というものだった。「私は金を払ってお前と遊ぶほど暇ではない。お前が料金を支払うのなら、仕事として請けてやってもいい」

そんな仕事、今まで請けたことなどなかったが。とにかく腹が立った。あんなことを言う少女にか、それとも、少女があんなことを言うまでにしてしまつた長浜にか、はたまた、こんな自分にか。

「なんだよ……それ？」

少女の声は少し震えた。

「言葉通りの意味だ」

私の声は少し震えた。

私はジツポーを鳴らし、煙草に火を点けようとするも、オイルが切れたのか点いてくれない。ジツ、ジツ……と火花が散るだけだ。なぜだか火花の中に、夢の少女が見える気がして、私は止められない。

「はあ……あーもう、なんかさ。もう……」

少女は何か言っている。

「……虚しくなってきたんだよな」

なけなしのオイルに火が点いて、小さな青い炎が火花をまといながら揺らめいた。辛うじて火が点いた煙草、それは希望だった。

「それなら、私が殺してやるうか？」

夢の少女へ向けて、私はずっと抱えていた怒気をはらんだ声、私の願いを放った。

「え？ そ、それって……」

夢の少女　姉さんは、瞠目して私を仰ぎ見る。姉さんをボロ雑巾にしたあいつを、僕が。

「あの男を、僕が殺してあげるよ」

「た、探偵のオジサン……？」

姉さんは顔を青ざめさせた。それはあの温度を思い出させる。血の気を失った姉さんの死体。僕を、笑顔のまま、虚ろに見つめ続けていた。

ふいに煙草の煙が目には沁みた。痛覚を刺激され、私は夢おぼろから覚めた。なにを言ったのかは憶えている。自分がどういう状況なのかも理解していた。故にひどい後悔の念にかられた。

「ビツクリしたか？」

私は少々おどけた調子で、なんでもない風を装った。どこぞの外国映画のように手のひらを上に、肩をすくめてみせた。

「な、なんだよもー……は、はは。ビ、ビックリしたー……アホじやねーの！」

私を罵倒する少女の引きつった苦笑い。気丈さはもう影すらない。姉さんと重なることもない。結局、私はこの少女を姉さんとダブらせて、自分の怒りを正当化させようとしていただけなのかも知れない。それは、それはとてつもなく下衆な行為だ。我ながら呆れ返るでも。

「ふふ、すまん。まあ、虚しくなったのなら止めればいいんじゃないのか？」

私は煙草をくわえ、明度を増すオレンジを見つめて長く煙を吸い込み、長く長く 煙を見つめながら吐き出した。

「……そう、だよ。……もう、止めれば良いよね？」  
「私が決めることでもないが」

小夜子には深入りすると言った。だがこれは、完全に業務を超えた深入りだ。私の私的感情に基づく暴走だ。度を超えた感情移入は、探偵としては二流、三流だ。当の私が三流なのだから仕方がない、と言いつくしてみる。

「……うん。……うん、分かった。洋介に、もう止めるって言うってみる」

少女は自分に言い聞かせるように二度うなずき、彼女なりの一歩を決意しようだった。

「そうか。もし揉めるようであれば、また連絡をくれればいい。力になれることもあるかも知れない」

少女は性的に未熟でも無垢でも決してない、そんな誰かの言葉は間違いであるように、目の前の少女は年相応の純真無垢な笑顔を浮かべている気がした。あくまでも気がしただけだが。

私は煙草を携帯灰皿に放り入れる。消える火種のように、この少女の後悔や未練が消えて無くなれば良いのにと、どうしようもないことを思った。

「探偵のオジサン」

「なんだ？」

少女は立ち上がり、私を見つめる。それは、曇りのない瞳に見えた。もしかしたら暗がりで見誤ったのかも知れないが、よく通るその声は、もう沈んではいなかった。

「なんか知らないけど、ちよつとスッキリした！　ありがと！」

私は「ふふ」と自嘲の笑みをこぼし、「私は何もしていない。本当に　なにもしていない」と、捨て台詞を残し、その場を立ち去ろうとした。しかし、ふと思いついた。

「そうだ」

「なに？」

振り向いた私に、少女は小首をかしげる。

「私は長浜より年下だ。まだ二十代だ。長浜が兄ちゃん、私がオジサンというのは納得しかねる」

「うっそ！？　四十近いと思つてた……」

「もう連絡してくるな」

私は『ぶんすか』という言葉が当てはまるような、漫画的な怒り方でその場を立ち去った。

「お兄さん！送つていつてよ！」

「知らん！」

小夜子は難しい顔をして、夜の事務所です長の机と睨めっこをしていた。時折マイナスイオンライバやキリ、針金などを引き出しの鍵穴に突っ込んで溜息を吐く。部屋の明かりは消してあり、窓から射す街灯のみでの作業だった。

所長がいつも見ている書類を拝見しようという考えの小夜子。あれを見れば、所長の考えや行動が分かると思つたのだ。

「んー、鍵つて開かないもんだな……」

小夜子は一瞬、こじ開けようとも思つたが、それではなんだか負

けな気がして止めた。

「どーしよっかな……」

「うおおッ?!」

小夜子が意識を、引き出しから移したタイミングで電話が鳴った。驚きのあまり立ち上がり、冷や汗を噴き出した小夜子は、出るべきか否か迷った。5回のコールで、電話は所長の携帯電話へ転送される。小夜子は3回目のコールあたりで出ないことに決めた。

そして、小夜子が再び引き出しの前で屈んだとき、電話はふいに切れた。コール音は4回で止まった。所長に転送されないギリギリのラインで、相手は電話を切ったのだ。

偶然か、作為的なものか、小夜子は思考を巡らす。

所長が小夜子に連絡するのならば、彼女の携帯電話が着信するはずだった。小夜子はすでに帰宅したということになっているからだ。この電話が鳴ったということは、つまり事務所に用事があったのだろう。すでに夜も更けているが、依頼の電話が鳴ることは稀にある。特殊な状況下に置かれているため、過敏になりすぎているのだと、小夜子は結論した。

なんだかやる気を削がれた思いで、少し休憩しようと立ち上がった小夜子は、一瞬で飛ぶように所長の事務机に寝転がっていた。休憩で横になるには適した場所ではないし、なにより前転宙返りを決めて休む人間はいない。

「は?……え?……な　ぐッ!?!」

「泥棒はいけねえなあ。んー?」

状況を飲み込まず、混乱している小夜子の頭に、低音の渋い声が降ってきた。軽い調子の喋りだが、返答しただいでは殺されかねない雰囲気の小夜子は感じた。

「あぐ……あ、えと……、ここ、の……事務所の……者すよ」

首元を鉄のように硬い腕で押さえつけられているため、小夜子は切れ切れの声で返答した。

「あんま面白くねえなオイ。もっとこう……スパイスの効いた冗句を頼む」

小夜子をねじ伏せているのは、2メートルはあろうかという長身瘦躯の男だった。高級そうなスーツに特殊な形状の外套。そしてシルバーフレームの眼鏡。ハリのある声とエネルギーギツシユな瞳は非常に若々しい。だが、白髪が多いグレーの頭髪が年齢を不詳にしていた。

「だ、だって……こん、な……引き出し、漁って……も、金目の物なん……て、ないすよ」

「かはッ！ 金目の物が欲しくて、こんなくたびれた事務所に盗みに入る奴なんざあいねえよ」

小夜子は息苦しさと恐怖で目を白黒させながらも、拘束から逃れようともがく。しかし、首は辛うじて声が出せるだけ、両腕はどうしてか体の下に入ってしまった。右足は男によって踏まれていて動かせない。左足は棒状のもので押さえられ、もちろん動かない。完全に賊扱いの小夜子。

……だが待て何かおかしい。そう小夜子の直感めいたものが脳裏をよぎる。酸素不足で鈍る脳みそを必死に回す小夜子。

「ドア……」

小夜子は一つの結論をもってして呟いた。

「それが？」

男は少し嬉しそうに促した。

「ドアの……か、鍵……は、開いて……た、すよね？ なのに、……」

こ、こん……な引き出しの、鍵をあ、開けられない……のは、変……すよね？」

「かははッ！ いいねえ！ お前なかなか見 あ？」

男は自分の左腕に、思わぬ力がかかっていることに気付いた。

小夜子の瞳は真っ赤に充血し、歯は折れんばかりに食いしばっていた。わずかに声を出せていたすき間を自ら投げ打ち、小夜子は首を男の左腕に押し付けていた。動脈が塞がれ、呼吸も出来ない。だが、それでも男の押さえつけている腕を押し戻そうとしていた。そして、それにより出来た小夜子の背中すき間。両腕が開放される

には十分足りえた。

「ぐ……うおあああああああ！！」

「マージかよ……」

咆哮を上げて振り抜かれた小夜子の拳は、寸でのところで回避されてしまった。しかし、小夜子の異常な反撃に怯んだ男は、拘束を解いて後退したのだった。

「メスゴリラかよ……くははッ！」

「うう……ゴッ、ゴフッ！……お前が……！！！」

小夜子はひゅーひゅーと妙な呼吸音を鳴らし、充血した瞳で男をにらむ。

「げ、げほッ……う、はあ。よ、よく分かんないけど、お前が……悪者たる……」

明かりの消えたくたびれた探偵事務所。そんなところに音も立てずに現れた男。そいつ自身が言ったように、盗人なんかじゃない。もつとなにか悪いことを企んでいるやつに違いない。小夜子は事務所を、所長を守るんだと、震える脚をふんばった。

「いや違うよ。落ち着けて葉月」

「……………は？」

飄々とした男は小夜子の苗字を知っていた。面食らった小夜子の顔がよほど面白かったのだろう、男は指を指して笑っていた。

「……あ、あ……！？」

「いやー文人のやつ、確かにいい拾いもんしたなあ。うははははッ！！」

永塚文人、それは所長の名前であった。つまり所長の知り合いだったのだ。

「なんなんすか一体……？」

溜息混じりにつぶやいた小夜子。緊張の糸が切れたのか、ぺたんと床にへたり込んだ。

「俺は長倉ながくらつてもんだ。文人の友人で刑事だ。ビビらせて悪かったな葉月」



長倉は頑丈そうなステッキを、器用に回して外套の中へ収めた。  
「悪かったって言われても……。か、体のあちこち、痛いすよ。なんなんすかなんなんすか……」

小夜子は安堵から思わず涙腺が緩んでしまった。自慢の黒髪も涙で顔にへばりつき、ずるずる鼻水をすすり上げる。

「泣くほどかよ？ まあ、齒も欠けたみたいだしなあ。ちつとやり過ぎた、すまん」

「齒は前からすよ！ ……ところで、手帳見せてくださいよ。警察手帳」

長倉を睨みつけながら、小夜子は手を差し出す。「早くしてくださいよ」、「と言わんばかりにいくいくと手のひらを動かした。

「仕方ねえな。ちゃっかりしてやがる」そう言っつて、長倉は外套の中へ手を滑り込ませた。「葉月よ。俺が本当に文人の友人の刑事だと、確信したわけじゃないんだろ？」外套の中で、長倉の手は何かを掴んでいる。「気を抜くにや、まだ早かったんじゃねえの？」

小夜子は悔いた。嘆いた。己の迂闊さを。それを返上するため、行動しなければならぬ。だが、一度気を抜いてしまった小夜子は、再度挑みかかる気力をほとんど失っていた。故に、外套から出されるものが何かを見極め、判断し、最小の力で行動しなくてはならない。決意したとたん、小夜子の視界には長倉しか映らなくなった。恐るべき集中力である。

「くはッ！」

小夜子の異常さに気付いたのか、長倉は妙な笑い方をしながら、無造作に『それ』を投げた。無造作といつても、長倉の動作は素早かったし、暗がりで見極める物体を見極めることは困難だ。

！！……………。

小夜子の手と、長倉が放った物の衝突音が残響した。

「すんげえな葉月……。一度も目を逸らさねえし、まばたきすらしねえのかよ」

「弓道部でしたから」

いつもの眠そうな目に戻った小夜子は、警察手帳に目を落とした。  
「弓道部ってすげえんだな……。俺もやるときや良かったかな」

長倉は胸の中で、ここには居ない友人へと忠告をする。

文人、こいつは使いようだぞ。噛まれないように気をつけ  
るこつたな

「入道太さん……妖怪みたいな名前すね」

小夜子は屈託のない笑顔で長倉を見ていた。

「ほっとけ！ 敵つくて嫌いな名前だから、呼ぶなら苗字にしてくれ  
「見た目も敵ついから気にしないでいいんじゃないすか？」

「だから！ 余計に！ 名前です！ 呼ばれるのが嫌なんじゃねえか！」

小夜子は手帳に視線を戻し、「すみません」と棒読みで謝った。

「入道太さんは軍属なんすか？」

長倉は名前に関して諦め、『軍属』という部分にだけ返答する。

「軍にも顔が利く刑事。そんな感じだな。まあ、あんま気にすんな  
つて。文人がいねえなら俺は帰るよ」

小夜子から手帳を受け取った長倉は、いったん玄関に向けた足を  
止めて振り返った。

「なあ葉月」

「なんすか？」

小夜子はどこか心ここに在らずだった。

「お前が開けようとしていた引き出し、俺が開ける方法を教えてや  
つてもいいぞ」

「え？」

小夜子は少なからず驚いた。長倉はそこに入っているものを知っ  
ているのかもしれない。そして、開けてやってもいいとさえ言い出  
した。

「ただし、俺は鍵を開ける方法を教えるだけだ。本当に開けるのか  
どうか。開けたとして、その中身を見たお前が、どういう行動にで  
るのか。そのあたりは自分で考えてくれ」

「わ、分かったす」

「別に開けて見なくなつて、葉月の探偵助手ライフは大して変わらねえ。だが開けちまつたら、あいつの泥沼に足を突っ込むことになんぞ?」

「……うん」

小夜子の瞳に映る、揺るぎない気焰を長倉は見た。

「そうか」

そうして長倉は、小夜子に鍵を開ける方法を教え、そのための器具を渡してくれた。

「熟練すれば数秒で開けられる。錠にもよるがな。悪用すんなよ?」

これから悪用する者へ送る言葉としてあまりに不適切だった。それを分かつていて言っているのだから長倉も相当な人物だ。

「入道太さんは刑事とは思えない人すね、いつか逮捕されるすよ」

「かはッ！ 俺を逮捕できる人間なんて、いまの警察機構にやいねえよ」

冗談なのか本気なのか、小夜子には判別がつかなかった。ただ、薄暗い街灯の射光に照らされた長倉は、所長とは別の意味で非現実感があつた。明確な違いを挙げることはできないが、小夜子は陰と陽、そういうイメージを受けた。

「んじゃ帰るわ」

長倉はのっそりと長身を起こし、軍用の外套をはおつた。小夜子の目には、ひるがえつた外套の内側に 警察だとか軍隊だとか、そういう人であるかと、普通は持っていないような物がたくさん見えて、顔から血の気が引いた。

「あ、ありがとうでした!」

小夜子はしどろもどろながら、長倉に精一杯の感謝を述べた。

「ああ。……頼んだ」

長倉はコツコツと、現れたときには聞こえなかつた靴音を鳴らして事務所を去つた。

小夜子には一つだけ、長倉に関して信じていいのか分からないことがあつた。長倉の警察手帳は本物で、軍属というのも、手帳にあ

った肩書きや身のこなしからして本当だろう。気がかりだったのは、『文人の友人』というところだった。それが嘘であれば大変なことになる。だから小夜子は、ずっとそのことだけは疑いを持ち続けた。しかし、最後に長倉が残した言葉。

『頼んだ』

小夜子にとって、これは何をどう頼まれたのか不明であったが、間違いなく友人としてのお願ひ 頼んだ、であったと、小夜子は感じた。文人 所長を心から心配している友達の声だった。

「はい。頼まれたす……！」

長倉との練習で開錠された引き出しを見つめ、わずかな逡巡のあと、小夜子は一気に引き開けた。

そこには予想通り、所長がいつも眺めている書類があつた。古びてはいるが、きちんとファイリングされていて、劣化はほとんど見られない。

小夜子はいくつかのファイルを取り出した。それはよく吟味するまでもなく、すぐになんなのか理解できた。ありとあらゆる新聞の記事、ニュース番組を録画したのであろうディスク型記録メディア、ネットのニュースや掲示板の内容を印刷したもの、果ては警察関係者でなければ手に入らないような、鑑識報告書や捜査報告書のコピー。解剖結果の報告書まである。

これら全て、形式や媒体は違えど、同じ事件に関係するものだった。

14年前に起こった女子高生強姦殺人事件。

被害者：永塚 ハル（17）

第一発見者：永塚 文人（15）

新聞記事などには未成年のため名前の記述は無かったが、警察関

連の報告書には、被害者、被害者家族（第一発見者）の名前が写真数枚付きで載っていた。被害者は永塚ハル、永塚文人　つまり所長のお姉さんだった。顔写真をみると、快活そうで如何にもお姉ちゃん、といった雰囲気を持つ少女。誰がいつ撮った写真なのか、非常にかわいらしい笑顔で写っている物もある。一方、第一発見者である永塚文人は、姉のハルによく似た女性よりの顔立ちで、これまた如何にも頼りなさそうな弟、そんな雰囲気だった。

小夜子は意図せず周りを見回し、身震いした。このファイル群から感じる違和感。小夜子は自分の手が、脚が、視界が、この事務所が、この世に存在しているのかと疑問に思うほど、現実感を欠いていることに気付いた。それは、小夜子の脳が受け入れがたい何かを感じたがゆえだろう。

執拗なまでに集められた情報。どんな小さな取り扱いだろうと、ピックアップしてファイリングされている。現場に自らおもむいて調査したと思われる書類もある。

だが、それだけならば　まだそれだけならば、探偵という調査業の性質上、異様だと完全否定はできない。

小夜子がつも違和感を覚え、そして異常だと感じ、恐怖に駆られた事実。それは　、

これだけの情報がかき集められ、更には14年経つたにも関わらず、犯人が捕まったという記事や報告書が一つも無いのである。

「所長は、まさか犯人を……………今でも　」

小夜子の声は、小夜子自身、まるで現実味を感じないまま事務所で反響した。

私は深夜の公園から真っ直ぐに帰宅し、睡眠導入剤を2錠ほど飲

み下して泥のように眠った。薬の力でも借りないと、浅い眠りの中で悪夢でも見そうだったからだ。

朝は思ったよりも早く目が覚めた。かといって寝不足感があるわけでもなく、スズメの鳴き声を楽しむ余裕さえあった。昨日の晩、あの少女はなんだかスツキリしたと、そう笑ってみせた。それは、私も少なからず同じだったのかも知れない。

姉さんの事件に関して、私は忘れたわけではないし、忘れるつもりもない。忘れようがない。だが、少しだけ前向きな気持ちになっているようだった。それが諦めや開き直りに近いものである気がしてしまいが、私は考えないようにして身支度を整えた。

オンボロのマイカーに乗り、事務所へ到着したのは7時頃。なんの案件もないのに、こんな朝早く事務所へ来るなど、開業したての時期を思い出してしまふ。

事務所への階段を上りながら、小夜子の気落ちした顔、じとじと睨みつけてくる顔、それらが頭をよぎり、苦笑してしまふ。小夜子が来る前に、またプリンでも買いに行こう。

鍵を開け、事務所に入ると妙な光景が目に入ってきた。ソファでうずくまっている小夜子がいたのだ。高級な墨汁を流したかのよう滑らかな長髪が、床に緩やかなカーブを描いている。初めて小夜子に出会ったあのゴミ捨て場。等身大の日本人形でも捨てられていたのかと思った、あの夜を思い起こさせられる光景だった。悪い夢でも見ているのか、小夜子はしかめっ面で眠っている。寝息は穏やかなので、特に身体への致命的な損傷はないだろう。

私の事務机は綺麗に整えられてはいるが、最後に見た状態とはだいぶ違う。そして、机の脚が床に傷を作っていた。引きずったような擦過傷だ。小夜子の昨日と同じスーツも、少しは払ったのだろうか、埃で汚れている。

明らかに争った形跡だ。だが、屋外ではなく事務所内となると、ほぼ小夜子と争った人物は確定する。

長倉のバカだろう。あいつは身内を本気で殺傷したりはしないが、

事務機のパソコンとかが壊れたらどうしてくれるのだろう。まったく、小夜子も含め、血の気の多い連中だ。あとで机は自分流に整頓しなおしが必要である。

私は無理に小夜子を起こさず、目が覚めたときに飲めるよう、コーヒーを淹れ始めた。少しヌルめが好みだったはずだ。砂糖1個にミルク有り。私の粗相で振り回してしまった侘びもこめ、普段はあまり使わない高級で手間のかかるものにした。

私がコートをハンガーにかけ、二人分のコーヒーを給湯室から持ってきた頃、小夜子はむくりと起き上がった。しよぼしよぼした目を擦りながら、「いい匂いすね」と小さな声で言った。

「ああ、高級なほうを淹れたから美味しいはずだよ」  
「あざます」

小夜子はお礼と思しき言葉を寄こし、コーヒーカップを受け取った。

私はゆっくりとした動作で、自分のカップを持って小夜子の対面へ移動した。小夜子は、いつも以上に閉じかかった眠そうな目蓋を暖めるように、カップへ口をつけたまま淡い茶色を見つめていた。

「小夜子くんは、木登りが得意なんだな」  
「ぶふッ!」

私の言葉に明らかかな動揺をみせる小夜子。正直すぎて探偵失格じゃないかと思ってしまった。

「な、な、な……ッ!」  
「いくら話の聴こえる範囲に隠れられる場所がないからって、木に登るはどうかと思うよ」

「な、な……なんのことすかッ!？」  
ここで挫けずにトボけるなんて衝撃的だった。  
「髪の毛に葉っぱが付いているよ」

私が小夜子の頭髪を指差すと、慌ててふん掴み、「こ、これは朝ごはんにと思っただけッ!」と、食べようとしてうな垂れた。

斬新すぎるトボけかただ。大丈夫だろうかこの子。

「いいよ、気にしなくて」

私はできるだけ優しく言った。小夜子は巻き込まれただけ、正確には、その好奇心の強さゆえに首を突っ込まざるをえなかった。それを知っているながら、強く釘を刺さなかった私にも落ち度がある。

「すんません。じゃ一個だけ……聞いてもいいですか？」

小夜子は珍しく目を見て話さない。いつもならば、的のど真ん中を射る矢のような目をするのだが。

「なんだ？」

「所長は今、じゃなくて……んと、

小夜子は頭をぼり、と一掻き、

あの子を……助けたかったんすか？」

消え入りそうな声で言った。

あの子とは、昨晚会った長浜の愛人のことだろう。

「んー、……たぶん、違う」

小夜子はこれまた珍しく背を丸めている。

「そうなんすか……」

「ああ、たんなる気まぐれだ。小夜子くんには深い入りするなと言ったくせにな。私は……ダメだな」

「そんなこと、ないすよ」

いつも元気な小夜子。落ち込んだ顔はあまり見たくないものだな。それにしても惜しかったな、小夜子くん」

急な話題転換に驚いた小夜子。コーヒーを口に含んだまま、「ん？」という顔をしている。

「ある先輩探偵が、後輩探偵に言った面白い言葉がある」

「ほほう？」

興味深そうに小夜子の眉毛が持ち上がった。

「私を尾行し、調べられるのならやってみる。それができたのなら一人前だ、と」

「ほほう！……ほほう！」

小夜子はフクロウにでもなってしまったのかも知れない。妙な鳴



き声を上げている。

「対象の真横に生えている木に登っちゃう小夜子くんは、どう考え  
ても不合格だな」

私を尾行して先回りをした上に、少女に気付かれることなく木に  
登る。探偵というより忍者みたいだ。

「……………そ、そすね。はは、は」

小夜子は少しだけ、困った顔で笑ったのだった。

家に帰っていないらしい小夜子が、事務所の簡易シャワーを使っ  
ている間に、新しい仕事が舞い込んできた。なんでも、買ったばか  
りの犬が飼い主に噛みつき、逃走したのだと言う。大方、つけられ  
た名前が気に入らなかつたのだらう。しかし、ペット搜索は専門外  
だったので、私は知り合いのペット探偵に話をつけた。餅は餅屋と  
いうわけだ。彼らは犬を探すときは犬に、猫を探すときは猫になる。  
もちろん比喻なのだが、電柱ヘマーキングの真似事までするのだか  
ら、あながち大間違いってことはないだろう。手伝えば、紹介料と  
いうことで少し料金を回してくれるらしいので、私は俄然やる気だ  
った。

「新しい仕事すかー？」

シャワー室の方から小夜子の声が聞こえてきた。

「ああ、ペット搜索の手伝いだ」

「えええー……………」

小夜子は俄然やる気がなかった。

「働かないと事務所のドアとテーブル代が稼げないよ？」

「……………つもらん。所長の話はつもらん」

私は一度マジで怒ったほうがよいのかも知れない。

そんなどうでもいい会話を小夜子と繰り返していた緩やかな朝、  
突然の闖入者が現れた。

ドアが急に開いて、制服姿の女の子が事務所に飛び込んできた。  
あの少女だ。

「探偵のオジサン！」

「な……！」

背中に冷たい汗が流れた。とても動揺していることを私は自覚した。連絡をくれてもよいと言った、だが突然訪ねてきてもよい、とは言っていない。

「いえーい！！！」

少女は私の顔を見て、とても嬉しそうに飛び跳ねている。なんだ？ いえーいつてなんだ？ どうすればいいんだ。

「……速やかに帰れ。学生が出入りするようなどころではない」

私が邪険に扱っても、モノともせず詰りてくる少女。調査対象の浮気相手であるところの少女が、調査を請け負う探偵事務所に入入りしているなんて、誰かに知られたら沽券に係わる。

「お願い！」と目の前で少女は私を拝むように手を合わせた。

「なんだ？」

あからさまに不機嫌な顔をしてみせたが、どうやら少女は気付いていない。話を聞かない誰かに少し似ていた。

「エンコー止めたしさ、私を助手にして！」

「はあああー！？」

私ではない。私が声を出す前に、シャワー室の入り口から小夜子の大きな音が響いた。

「ちよつと！！ 助手は自分一人で十分すよね所長！？」

小夜子はインナーの白いブラウス一枚で飛び出してきたように見えた。一瞬ヒヤツとしたが、下着の上に穿くショートパンツらしきものも身に付けていたので、私はホッと胸をなで下ろした。いやちよつと待てこれはこれで。

「オジサン！ 聞いてんの！？」

「所長！ 聞いてるすか！？」

頭の痛くなる一日になりそうだった。私は煙草 希望を口にく

わえてジッポーを鳴らした。

小夜子を雇ってから、この事務所はずいぶん騒がしくなった。このまま、私の暗い希望など吹き飛んでしまえばいい。キャットフアイトを背中で聞きながら、私は煙草の煙に目を細めた。

「所長！」

「オジサン！」

顔に濡れタオルがぶつかってきた。さすがにこれは姦かしまし過ぎやしないだろうか。

どうしたものかと、私は火種が消えてしまった煙草を見つめて、大きな溜息を吐いたのだった。

次話へつづく

#### 4・HOPE(後書き)

最後まで読んでくださった皆様へ。

ありがとうございます！

次話は、新しい依頼がきます。わだかまりを抱えつつ、二人の奔走はまだ続きます。

次話以降もお暇があれば、ぜひまたお越しください。

## 5・べちとじす(1)

「今度は所長がエンコーすか」

「それはない」

「ふーん……」

あの少女　佐山渚さやまなほが事務所に乱入してきてから数日、小夜子の機嫌が悪かった。

幸いその不機嫌も長くは続かず、今は落ち着いている。

「それにしても、依頼ってあんまり来ないもんすね」

小夜子は長い手足を伸ばして欠伸を噛み殺した。

「まあね。探偵に依頼するなんて、個人の心情からすればハードルが高いからな。かといって企業の素性調査がくるほどの探偵事務所でもない。安全印がないからね。初めに説明したはずだよ」

「聞いた気がするす……。なんたら協会に加入してないんすよね？」  
頭脳は明晰なのか、はたまた勘が鋭いだけなのか、小夜子の評価はまだ難しい。

「まあ、気にしなくていい。でも、依頼はいつくるか分からない。今は携帯電話に転送してくれるから良いが、昔は事務所に寝泊りしたらしいぞ」

「うへえ……。それはキツイすね」

「探偵はタフじゃないといけない」小夜子くんは心配なさそうだが、という言葉は飲み込んだ。言ったら酷い目に遭うことは間違いない。「そうすか……。これでも筋トレしてるんすよ。ちよっと触って見てください」

小夜子は力こぶを作って私に差し出す。細くて折れそうだったが、触ってみると意外と引き締まっていた。

「ぶよぶよじゃないか」

「まじすか……」

小夜子が残念そうにうな垂れた時、私の携帯電話が着信した。確認すると佐山渚からだった。

佐山渚は、「探偵は頭が良くないと駄目だ」という私のあしらいを真に受けたのかは分からないが、あれから真面目に授業を受けているようなメールが、たまに携帯電話に届く。依頼人とは依頼が終了しても連絡を取り合ったりすることはあるが、もう関わらないと決めた筈の浮気相手とやり取りしている探偵は如何なものか。

それに、なにか重要なことを失念している気がする。思い出せない級友の名前みたいに、核心の手前でぐるぐると思考が周回して、一向に近づけない。私は考えるのをやめ、メールの内容に意識を戻した。

「小夜子くん」

先日の長浜洋介の調査報告書に目を通して小夜子。呼びかけに応じて向けられた半目が、普段より不機嫌そうに見えたのは、私自身の心象が原因だろう。ジトツとした目はいつも通りのはずだ。恐らく。

「なんすか？」

書類を置いた小夜子くんの折れた前歯は、そういえばいつの間にか綺麗になっている。

「これ、どういう意味？ 最後の一文がわからない」

私は佐山渚から来たメールを小夜子に見せる。

「どれどれ……って、やっぱエンコーすか！」

「な、なぜだ？」

「だって、『愛してる』って書いてあるじゃないすか！ ってかなんで読めないんすか？」

日本語が分からなくなってきたことと、メールの内容で二重にシヨックを受けた。

「なんて返信するんすか？」

いよいよ小夜子くんの目が湿気を帯びてきた。

「無視だな」

私が携帯電話を仕舞おうとすると、小夜子が「自分が返信してやりますよ」と携帯電話をふんだくる。やけに楽しそうである。

「オイヤめろ」

私の制止の声を無視し、ぽちぽちと携帯電話をいじくる小夜子。

「完了」

私が奪い返す間もなく、小夜子は返信を終えてしまった。「なんて書いたんだ？」と私は小夜子を睨みつける。

「結婚はできない」

「……………」

思わず笑いそうになった。

「上出来っすか？」

短い前髪の下で半目が得意そうに光る。

「まずまずだな」と私はジツポーを鳴らす。

煙草の煙は午後の日差しを受けて青白く揺らめいた。スモーカーである私の傍にいるのに、どうして小夜子は煙草臭くないのだろうと不思議に思う。私の鼻が麻痺しているのだろうか。

小夜子は調査報告書に視線を戻し、「その後、長浜夫人から連絡は？」と携帯電話を返してくる。

「ないな。何事も無く元通りに収まっているのかも知れない」

「ないすね。それこそ、ないすよ」

「私もそう思う」

なにを以ってして『何事も無い』と言うのか、こういう場合は線引きが非常に困難だ。

しかし、調査結果を犯罪などに使用しない旨の書面を夫人から貰っている。だから余程のことはしないだろうとは思う。依頼は完了した。後のことは私の知るところではない。相談されたならまだしも、こちらから夫人にアクセスすることはまずない。佐山渚に会っていた私が高説をたれても、説得力など皆無ではあるが…………。

「どうして佐山渚は所長を呼び出したりしたんすかね……………しかも交

際をほのめかしたり」

「ん？」

小夜子の言葉で、私のぐるぐる回る思考は周回軌道を外れた。「痴情によって、探偵を雇う、探偵を呼び出すという行為。そこには大なり小なり必ず勘定や謀はかりごとがある」

私は口に出しながら考えをまとめ始めた。佐山渚は一体なにを策謀していたのか。あの無垢な瞳は、やはり暗闇で見紛うたのか。いや、無垢だからこそ　なのだろうか。

いずれにしても、私は探偵にあるまじき大失態をさらしてしまった。公私混同も甚だしい。私の場合、探偵という道こそが公私の『私』なのだから、今更ではある。しかし、受けた依頼は完遂し、依頼主に『ここに依頼してよかった』と思ってもらいたい、という気持ちも強い。存外に探偵という職業を気に入っていたらしい自分が、なんだかよく理解できなくなってきた。

「しよ、所長？　じ、事務所の階段がドカドカいつてるんすけど…」

「え？」

私の懊惱あつらひををよそに、小夜子くんは焦り顔でファイティングポーズをとる。階段を踏み潰さんばかりに上ってくる何者かと対決するつもりらしい。

「まったく、」

お次はなんだ？

私は煙草を灰皿に押し付け、新たな芸術作品の一部品とした。

「探偵さん！」

ノックもなく扉を豪快に開け放ったのは、夢食堂の『夢おばちゃん』だった。直したドアの蝶番が軋みを上げ、ネジが一つ跳んだ。ドアは開けて通るもの、もしくは招かれざる者を拒むものである。それを破壊して突破するなど、招かれざる客に違いない。

「出前は頼んでいませんが……」

私は椅子から立ち上がり、夢さんへ歩み寄る。小夜子は驚いたの



か、びつくり顔で固まっている。カメラに収めておきたい面白顔だ。  
「大変なんだよ！」

エプロン姿のままの夢さんは動揺し切った様子である。エプロンは厨房以外では付けない、と豪語していた夢さん。なるほど確かに大変なことが起こっているのだらう。仕事の匂いがしてきた。

慌てる夢さんをなんとか落ち着かせ、その際に何故だかピンタを数発いただいた私と、小夜子は詳しく話を聞いた。

「息子が失踪したんだよ」

話では、結婚して別々に暮らしている息子が突然、姿を消したと言うのだ。息子の妻からの連絡で知ったようだ。

「あの子、死んでるんじゃないだらうね……」

年間の失踪者は、届けられているものだけで約十万人。一方、自殺者は年間で三万人ほどになる。失踪と自殺をイコールで考える人が割りと多いのだが、失踪の理由が必ずしも自殺に直結するわけではない。しかし、夢さんの息子さんの場合は以前から精神状態が芳しくなかったようで、こうなると自殺の可能性は飛躍的に上がり、かなり切迫した状況である。

「最初は警察に行っただけだね、話にならないもんだから店長を呼んでもらったのよ。それで長倉っていう刑事が出てきたんだけど追い返されちゃったのよ！」

対象が成人の場合、事件性がないと警察は動けない。それは大きくなった組織が効率化を図る上で、避けては通れぬところだらう。夢さんの案件の場合、誰かにさらわれたとなると話は別であるが、置手紙があったようなので事件性は無しだと判断されたのだらう。

そういう時、私のような探偵の出番となる。その人の生き方や判断、状況というものがある為、警察が動けない案件を私たちが請け負うのである。

夢さんは刑事課に乗り込んで直談判したようだった。いつから店長になったのか知らないが、そこで長倉が出てきて追い返されたというわけだ。直談判する夢さんも凄いが、それを追い返す長倉も凄

い。

「それでその長倉が、隣の探偵さんのところに行けって言うもんだから、こうやって来たというわけよ」

「そうですか」

夢さんは警察に怒り心頭の様子だったが、むしろそちらに気が向いていて、心配する家族の悲壮感は今のところ薄れている。共倒れになってしまつては最悪だ。長倉はそこら辺も考えて、きっと夢さんの怒りを煽るような蹴散らし方をしたのだろう。敵ついわりに細やかな精神をしている男だ。

小夜子はというと、コーヒーを用意したあと私の隣で真剣な面持ちをして動かない。完全に緊張してしまっている。下手をすれば命にかかわる案件だし、本格的な仕事はこれが二つ目だ。無理もない。私は夢さんをお願いを正式に依頼として受けることにした。息子さんの妻の連絡先や住まいなどを聞き、注意事項を話したら夢さんには一度帰ってもらった。失踪した昨晚から眠っていないようだったからだ。

夢さんが帰り、仕事の段取りを小夜子と決めていた時に事務所の電話が鳴った。電話を取った小夜子が「長倉っていう刑事からなんですけど……」と私を見つめる。

「ああ、携帯にまわしてくれ」

「了解す」

小夜子はどうにも嘘が苦手らしい。嘘を吐く行為が苦手、というよりは嘘そのものが苦手なのだろう。「長倉」という名前を口にした時、視線があさつての方向へ向いていた。

私は知らないフリを決め込んで、まわってきた電話に出た。

『おいおい、なんなんだアレは』と辟易した声が聞こえてくる。相変わらず低くて渋い声だ。

「夢おばちゃんだ」

『本当にそんな名前なのか、アレが?』

「失礼だな。夢があつていいじゃないか」

『それもそうだな。……刑事にビンタしたことは許してやったよ』  
ニヒルに笑っている声が聞こえてくる。

「お前もビンタされたか」

『なんだ、お前もか。必死だったからな夢さん。お前をお願いしたが、それでよかったよな？』

「大丈夫だ。ちゃんと私のところに来たよ」

『そうか。なら頼んだ』

妙に優しい声色の長倉。

「ああ、迅速に対応する」

『そうか、それならOKだ。ところで、お前はまだ……姉さんの事件に固執してんのか？』

「なんだ急に……。関係ないだろう」

『まあな。別に俺が担当だったわけでもねえしな。しかし、お前のそれは妄執に過ぎんぞ』

それは、刑事と探偵というものを越え、旧知の友人を心配する心からの声だった。

『関係ないだろう』

しかし私は、同じ台詞を繰り返した。

『……そうか』

「夢さんの件は任せてくれ」

『ああ』

長倉のほうで通話が切られ、出来損ないのモールス信号みたいな音が、耳朶に不快感を呼んだ。私のいない事務所に現れた長倉。そこで小夜子と接触。そして、姉さんの話を持ち出してきた。ここ最近の胸のざわめきが、また一段と大きくなった気がした。

小夜子はそんな私に興味津々の顔で近づいてきた。笑顔ではあるが、まだ少し緊張が解けていないように思える。

「刑事とも繋がりがあるんすか？」

「ああ、旧知の仲だ。それに、職業柄お友達が多い方が良いだろ？」

「長倉さんは友達すか？」

「恋人だ」

小夜子は絶句した。

「嘘に決まっているだろう」

「そ、そうすよね。焦りました」と瞳をきよるきよるとさせる小夜子。どうして顔が赤いのかは考えたくなかった。

「早速、夢さんの息子さん宅を訪問しよう」

冗談を言っている場合ではない。

「了解す！」

佐山希の妻である佐山七海さやまのなみは、夫が失踪したにしては随分と落ち着いていた。しかし、化粧らしい化粧もされてなく、目蓋は赤く腫れぼったい。落ち着いているというよりもこれは。

私達の訪問を夢さんから聞いていたらしく、佐山七海は直ぐに佐山希の部屋へと上げてくれた。

「警察は、全くとりあってくれなくて……」

「そうですね。刑事と民事の違いがありますので」

佐山希の部屋は整然としていて、フローリングの床はぴかぴかに輝いていた。履いているスリッパを脱ぎ、素足で感触を楽しみたくなるほどだ。佐山希の血液型はA型らしかったが、A型は几帳面で部屋も片付いているというのは単なる都市伝説だ。なんせ、私もA型だからだ。

「部屋を調べさせてもらっても良いでしょうか？」

「はい。構いません」

私の言葉に佐山七海は、やはり落ち着いた様子で頷いた。そこで私は気付く。これは夢さんとは正反対の状態。諦めた。佐山七海は諦めている。夫がこの部屋に戻るとはもう思っていない。恐らく、心配し疲れてそういう状態に陥ったのだろう。心配とはつまり希望だ。諦めてしまったほうが楽にはなる。それが健康的かどうかは別

問題だが。

それにしても、佐山渚は母親である七海に似ている。七海の四十歳にしては若い顔立ちに、渚の面影が重なり、それを起因として姉の面影もが脳裏をよぎる。

「小夜子くん。何かないか調べてくれ」

私は部屋を見回し終わると、仕事に没頭することにした。

「具体的には？」

「折り目の付いた旅行雑誌とか、行き先を特定できそうなものだ。あと、可能ならパソコンも調べてくれ」

「了解す」

小夜子は白い手袋をはめて作業を開始した。

私は佐山七海に向き直り、「置手紙があったと言ったことでしたが……？」たぶんその類は直ぐに探したことだろう。

「はい。探さないでください、とだけ……」

「そうですか」

妻子を捨てて失踪したにしては古典的であるし、簡潔すぎる。携帯電話やパソコンを使って、掲示板やSNSに書き込みをしている場合もある。そちらに期待しよう。

「ご主人になにか不審な点はありませんでしたでしょうか？ どんな些細なことでも結構です。いつもと違うことはなかったでしょうか？」

私はスーツのポケットからメモ帳を取り出し、ボールペンを構える。

佐山七海は暫く考え込んでから、ぼつぼつと語りだした。

「主人はいつも仕事で忙しくしていました。でもある時、精神的にポツキリと折れたみたいで。朝起きてもずっとソファに横になっていました。それでも、娘に話しかけると笑顔を見せていました。そんな日が続いていたんですが、最近、どこかにこっそりと出かけていたみたいです。娘には、主人は検査入院していると話しておいでいます」

「なるほど、どこに出かけていたか分かりますか？」

「たぶん銀行です。ふと、主人の通帳を見たら、結構な金額を何度かどこかに振り込んでいました」

きな臭くなってきた。今回の失踪に絡んでいるのかも知れない。詐欺、若しくは怪しい宗教団体への寄付なども考えられる。いずれにしる、あまり真つ当な使い道ではないような気がする。しかし、今は個人情報保護法のお蔭で、銀行の出入金履歴などは閲覧できなくなった。たとえ親族でも難しい。

「小夜子くん、なにかあった？」

部屋を調べていた小夜子は、いまはパソコンを弄っている。

「特に収穫は無かったすね。いまパソコンのデータ調べてます。パスワードは、その本棚にある作家のデビュー作のタイトルに、誕生年を加えたものでした。同じ作家しかないので、総当りで破れました。面倒がなくて助かったです」

ここにきて有能さを発揮し始めた小夜子に私は少し感動した。

「掲示板、ブログ、SNSの書き込みがないかも調べてくれ」

「そういえば、主人はブログに凝っていたみたいです」

佐山七海の瞳が俄かに輝きだした。希望を持ち始めたのだろうか。「と言うわけだ。ブログを見てくれ」

「分かりました。たぶんブックマークに登録されている筈ですよ」

私は小夜子の隣に移動してディスプレイを覗き込む。インターネッツトブラウザが立ち上がった。

「付属のブラウザじゃないな」

「そうすね。でも、タスクバーのランチャーに登録されていたんで履歴書には書いていなかったが、小夜子はパソコン操作に明るいらしい。今の時代、それは上々の武器になる。たとえデータが消されていても、やりようによっては復元できる場合がある。ごみ箱を空にした程度では、完全にハードディスクから消えたとは言えないからだ。」

「小夜子くん、消えたデータの復元とかもできる？」

「場合によっては可能ですよ」

そんな私達のやり取りを、佐山七海は複雑な表情で見ている。「パソコンって、怖いですね……」

小夜子はブラウザのブックマークからそれらしいものを探している。お決まりの検索サイトや、新聞社のサイトなんか登録されている。

「あ、たぶんこれですね。でも、ログインしなくちゃ駄目だなあ」

呟いた小夜子が矢印を向けているのは、有名ブログ運営サイトであった。そのサイトを開くと、案の定ユーザ名とパスワードを求められた。

「小夜子くん、IDやP A S Sを一括管理できるようなソフトウェアはインストールされてないか？」

無い場合は少し面倒になりそうだ。

「えーっと………。お。ありました！たぶんこれがそうだと思う」

小夜子は立ち上げた管理ソフトらしきものに、パソコンと同じパスワードを入力した。管理ソフトを開くためにもパスワードが必要らしかった。

「ビンゴ」

そう言うと、小夜子はもの凄い得意満面で私を見る。スパイ映画か何かの見すぎだ。

管理ソフトが開き、ブログの項目もあった。パソコンと管理ソフトのパスワードを同じにしてしまうのは如何なものか。お陰で手間は省けたけれど。これでブログ運営サイト内に佐山希としてアクセスできる。

結果、『のぞみのひとりごと』なるブログにたどり着いた。

小夜子は最新記事をクリックする。すると、一瞬の間があつてから、ブラウザに空の写真が表示される。青い空だ。ちょうど今頃のような高い秋の空。それを背景に、ブログタイトルである文字が筆で書いたようにトップにある。問題の記事はその下に書かれてあつ

た。

「これは……まずいすね」

小夜子は低い声でうめき、佐山七海は息を呑む。私は煙草を吸いたくなくなった。

死のうと思います。

だから、これは遺書になります。

妻へ。

無責任で本当にごめん。でも、もう耐えられない。何もかもが億劫で嫌になってしまった。理屈じゃ説明できない。本当にごめん。

娘へ。

君は僕の救いだった。辛くても、君さえ笑ってくれば、僕は幸せだった。もっと、正直な話を沢山したかった……。

家族三人で泊まった思い出のホテルで、僕は死のうと思います。皆さん、さようなら。

この日記が事実なら、佐山希は直ぐに見つかるだろう。失踪人探しとしては難易度低めだ。しかし、状況は悪い。失踪したのは昨晩今は午後二時を回ったところだ。もしかしたら手遅れになっているかも知れない。遺書を残している点から、警察も動いてくれるかも知れないが、それでもやはり遅すぎる。

ネットに遺書を公開しているあたり、誰かに構って欲しい一面も感じられる。そこに賭けてみよう。

「小夜子くん、この記事にコメントは？」

「ゼロす！」



「うん、なら『少しお話をしませんか？』的なことをコメントして時間を稼いでくれ」

小夜子は私の意図をすぐに理解したようだった。

「了解す！ アカウントは適当に作りますね！」

私はブログを小夜子に任せ、佐山七海にホテルの詳細を聴き出すことにした。

「思い出のホテルというのはどこでしょうか？」

急激に展開し始めた事態に、佐山七海は「あの」とか「その」とか戸惑いながらも、有名な海辺のホテルの名を告げた。ここからなら電車で一時間。乗ってきた車なら四十分といったところか。

「ちなみに何号室でしたか？」

「ええと」と佐山七海は頭を捻り、「222号室ですね。ゾロ目だったので憶えています」と間違いなさそうだった。

「ありがとうございます。小夜子くん、そっちはどうだ？」

「もうちょい！」

それから5分ほどで、佐山希のブログにコメントを残し、小夜子の携帯電話でブログを閲覧、コメント出来るようにした。

私と小夜子は佐山七海にお礼を述べ、急いで車へと戻った。

「わ、私も行きます！」

見送りにきた玄関先で、佐山七海が決意したように言った。気持ちは理解できるのだが、私はそれを丁重に断った。失踪人が成人の場合、本人の承諾を得てから家族に会わせることにしている。なぜなら、失踪という行為にも本人の意思があるからだ。無理に連れ戻しても失踪を繰り返すだけになる。さらに、失踪元である家族が一緒にいることで、相手の行動が予測しにくい状態に陥りやすい。

「無事を祈ってください」

私は年式の古いキャロルの運転席に、身体を折りたたむようにして乗り込む。車体がずしりと沈み、上がった軋みはキャロルの抗議の声を思わせた。

小夜子が助手席でシートベルトを装着したのを見て取ると、私は

「まだまだ若いもんには負けられませんよね？」と車のエンジンを  
咆哮させた。

「独り言はキモイすよ所長」

へちやいす(2)へちやいす

## 6 ペちとじす(2) (前書き)

少々乱暴な文言が出てきますが、極端に苦手でなければ大丈夫だ  
と思います。

## 6・ぺちとじす(2)

「スピード出し過ぎすよ所長！」

キャロルは轟音を上げ、幹線道路を駆け抜ける。景色が瞬く間に後方へ飛んでいく。遅い車は次々に追い越した。その度に小夜子は「うおッ」だとか「のおッ」だとか、悲鳴ともつかない声を出す。

「一刻を争う」

私は短く答え、カーブを抜けてアクセルをベタ踏み状態にする。

キャロルが心強く応えてくれ、さらに加速した。

「自分たちが死んだら意味ないすよ！ 落ち着いてください。所長から落ち着きを取ったら凡人以下すよ！？」

酷い言いように涙しそうだったが、あながち間違っではないと思ひ、私はアクセルから足を離れた。キャロルが一息ついたように速度を落とす。

「ふう、生きた心地がしなかつたすよ……」

小夜子が隣で緊張を解いたちようどその時、視界右側いっぱい青い海が広がった。

「おお……海だ！」

小夜子が感嘆の声を上げる。

波が砕けて所々に白さを見せる海。その開放感は凄い。空の青と、海の青が寄り添う水平線。雲のように白い飛沫を上げる海。海の飛沫のように白い雲を抱く空。どこかの坊さんの名を思い出し、面白い名前をつけたものだと感じた。その水平線には島が見える。確かに綺麗な景色だ。

「海に来ると必ず誰かが、『海だ！』って言うよね。今の小夜子くんみたいに。原始的欲求か何かなの？」

返答がないのでチラリと小夜子を窺うと、眉毛がひしやげ、頬は

膨らんで、とてつもない仏頂面になっていた。思わず急ブレーキを踏みそうになった。

「どうしたんだ小夜子くん？ トイレならもう直ぐで」

「自然の景色に感動できないなんて、所長の価値観はどうかしてる」

しかめっ面でもごもごと喋る小夜子。

「いや、私も感動はしていたんだよ」

「ところで、夢おばちゃんと渚ちゃんは似ても似つかないすね  
やっぱり小夜子は話を聞かない。」

「そ、そうだな。佐山渚はお母さん似だな」

「所長は、いつから渚ちゃんが夢おばちゃんの孫だって気が付いてたんです？」

「彼女の名前を聞いた時にもしかしたら、と」

「なんで言ってくれなかつたすか」

小夜子の声は低く早口で、私を責めている感がたつぷりだった。

「結局は分かつたんだから良いじゃないか」

「そうやって直ぐごまかす……」

小夜子がむくれました。

やがて、海辺に白い半月を埋め込んだみたいなホテルが見えてきた。空の雲に届けとばかりにそびえ立っている。この海辺の街には高層ビルが乱立しているが、そのホテルは飛びぬけて高い。日差しを受けて鈍色に輝くビル群の中で、真っ白に赫耀かくやくする様は神々しくさえ思えた。

「自分、ああいうホテル好きなんすよねえ」小夜子は独り言のように呟いた。「どうしてだ？」と聞かずにはいられない。高級感が良いのだろうか。

「まるであのホテルは、自分が優等生だと言ってるみたいじゃないすか。そういう声が聞こえてきそうすよ」

「そうだな。それが？」

「自分のことを優等生だと言う奴は、その実、けっこう良い奴なん

すよ。認めてもらいたいだけなんすよ」

「ほう……………。なるほど、面白い自論だな」

小夜子は頭脳明晰、というよりは視点が独特なのだろう。もちろんそれなりの頭脳も持っているが、独特ゆえに視野が狭くなって、うまく力を発揮できていない。そういう印象を受ける。

「無事だと良いすね」

小夜子は急に真剣な声を出した。

「そうだな。ブログのコメントに反応は？」

「ないすね……………」

失踪人探しを本人の無事を確認したことで成功とするならば、調査業全体での成功率は五分である。半数が無事に見つかり、それと同じくらいに無事では済まなかった人たちがいる。だからといって、毎回五分の気持ちで取り組んでいるわけでは決してない。必ず無事に見つける、という気持ちで動いている。

「到着」

小夜子はホテルの威容を窓に張り付いて見ている。よほど気に入っているのだろう。私はハンドルをきり、ホテルの駐車場へ続くスロープを降りてゆく。このホテルは地下に広大な駐車スペースがあるのだ。スロープは両側に緑が植えられ、ホテルの白と相まって色具合が絶妙だった。

地下に入り蛍光灯が光を投げかけてくると、無機質で仄暗い駐車場が広がった。幾つもの支柱が並んで影ができていて、昼間だというのに不気味な印象がある。たぶん、地下駐車場というのは何処も似たようなものなのだろう。

キャロルを駐車し、エンジンを切る。「おつかれさん」と私はキャロルに声をかけた。

「自分にはそんな言葉、殆どかけたことないくせに……………」

小夜子がそう言って私を睨んだが、ドアの開閉音のせいで聞こえてないふりをしておいた。今度からちゃんと忘れずに言ってあげようと思いました。

「けっこう混んでいるんだな」

見渡せる範囲は大半が車で埋まっていて、思わずそう呟いた。

「高級車が多いすね」

キャロルから降りると、辺りを見回して小夜子が言った。

「ホテルが高級だからな。仕事以外では縁がなさそうだ」

「ボロいとは思ってましたが、この中で改めて見るとホントにボロすね。良く平気で乗れるすよね、このカロル」

そう言つて、小夜子が私のキャロルを馬鹿にするように眺めている。

「帰りは歩け」

「しょ、所長！ 怒ったんすか？」

「ふん……」

「萌え」

全身に震えが走った。

「ふざけている場合ではない。急ぐぞ」

「了解す！」

地下駐車場のエレベータを探し当て、私達は駆け足で向かった。

不自然な静けさが支配する地下に二人分の靴音が乱反射する。

エレベータの前に立ち、ボタンを押した。エレベータの扉は教会のような豪華な装飾がついており、いささか派手気味な気がした。

「優等生だつて言ってるす」と小夜子が扉の言葉を通訳してきた。

「ああ、君は優秀だよと言つてやってくれ」

私は十階から降りてくるエレベータのランプをじりじりと眺めながら答えた。だから早く降りてきてくれ。

「君は優秀だよ。うちの所長が言っているから間違いないよ」

小夜子は扉に触れながら優しく言った。そんな言葉遣いもできるのかと新鮮だった。

「ていうか、日本語なんだ……」

私の声は扉に聞こえないのだろうか。

ランプが地下を示し、ぴんぽーんと大仰な扉と反比例する音色が

響いた。オーケストラの交響曲でも期待していたのだろうか、そんなエレベータは聞いたことがない。さつさと乗り込んだ小夜子に続き、私も足を踏み入れて壁に背を預けた。

地下から二階へ至るエレベータの中の私達は、それまでとは打って変わり無言だった。小夜子が緊張しているのが分かる。手のひらを見つめ、握ったり開いたり、それを繰り返している。失踪人探しの初陣で酷い目に遭わせたくはない。しかし、そう上手くいかないのも事実だ。なんとか緊張をほぐしてやろうと、慣れない冗句を紡いできたが、あまり効果は無かったのかも知れない。

ランプが二階を示し、豪華な扉や内装と食い違う親しみやすい音で扉が開く。

「覚悟はしておいてくれ」  
「はい」

小夜子は静かな、それでも確かで力強い返答を、先陣を切った私へ寄こした。

エレベータから一步踏み出した途端、これが雲の上か、と思うような柔らかい絨毯が敷かれている。足をつく度にふわふわとして、正直歩いている気がしない。私は確かな硬い感触が好きなのだな、と実感する。

廊下は真っ直ぐ伸びていて、どこからか小さく気にならない程度の音楽が流れている。各部屋のドアは正面に並んでいて、私達が出てきたエレベータはちょうど廊下の真ん中に位置するようだ。エレベータ側は窓ガラスになっていて、外からの陽光が絨毯の淡い色を映えさせる。

部屋のドアにはどれも生き物を模したノブが付いていた。イルカだったり、ゾウだったり、人魚だったりと節操がない。

私達は222号室の前で立ち止まると、互いに顔を見合わせ、頷きあう。小夜子のダルそうな瞳は、覚悟完了した光を宿している。

私はドアの脇にあるインターホンを押した。このドアノブはライオンを模してある。金色のライオンだ。私はライオンの咆哮を期



待してたのだが、響いてきたのは、びーツという当たり障りのない  
ピープ音だった。暫く待ってみるも、誰かが出てくる気配はない。  
ドアは厚そうだったので、そのせいか物音すら聞こえない。

「出てこないすね」

小夜子の顔と声は無表情だった。感情を押し殺していると言つて  
もいい。それは来たるべきショックに対応しようとしている風に感  
じた。

私はもう一度、強めにインターホンを押した。しかし、強めに押  
したところで強めに鳴る筈もなく、またしてもびーツと緊迫感を途  
絶えさすような間の抜けた音がする。まるでこういう状況の者を苛  
立たせるための音のようだと思ってしまう。

それでもドアは開かない。カギが開錠される音も聞こえない。「  
所長……」と小夜子は言葉を詰まらせ私を見つめる。

「痺れを切らすにはまだ早過ぎる。部屋に居ないだけかもしれない。  
小夜子くん、フロントで事情を説明して鍵を貰ってきてくれないか。  
部屋に居るのかも聞いてくれ。私はもう少しねばる」

「あい！」

小夜子は踵を返し、エレベータへ向かって駆ける。長い髪の毛が  
さらさらとなびいている。

私はドアへ向き直り、もう一度インターホンを押す。金色の獅子  
はやはり咆哮ではなく電子音を鳴らすだけだ。

小夜子がエレベータに消えた時、私は駄目もとでドアノブを回し  
てみる。ライオンの首を捻っているようで心地が悪い。

「あれ……」

ドアノブを回して押してみると呆気なくドアが開いた。嫌な予感  
がした。ホラーやサスペンス映画なんかでは、鍵がかかっていると  
思われたドアが簡単に開くと、良くないことが起きる約束である。

実際、良くないことが起こった。

「佐山さん！」と言いなから部屋に踏み込んだ私が見たものは、四  
十代間近のおっさんの全裸だった。

「うわあ！」

佐山希は全裸で驚きの声を上げた。そして直ぐに「誰ですか！」と怒りに変わった。

「貴方のお母様から依頼された探偵です」

私は佐山希のある一部分を極力見ないように話を始めた。部屋には、シャワーを浴びていたのだろうと思わせる香りが漂っていた。

「探偵？」

佐山希は、夢さんに似た団子っ鼻が目立つ顔を訝しげに歪める。申し訳ないことだが、佐山渚は父親に似なくて良かったと言えるかも知れない。

「探さないでくれと言ったのに……」

佐山希は豪華なソファの端っこに座る。ソファには太目のロープが置かれている。首でも吊ろうと思っていたのだろう。とにかく、間に合ったようで少しほっとした。

「どうしてここが分かったんですか？」と神経質そうに眉毛を動かす佐山希。

「うちの助手が優秀でしてね。ブログを見させてもらいました」

「そういうことですか……」佐山希は残念とも安心ともつかない表情を見せた。「探偵さんは僕を止めに来たんですか？」

「私は探し出すのが役目です。自殺を止めるのが役目ではありません。ん。が、ここで死なれては夢見が悪い」

「じゃあ……？」

「止めます」

途端、私の台詞へかぶる形で、叩きつけるように背後のドアが開いた。

「死んだら良いじゃないすか！」

ぎよつとするような台詞が背中から聞こえた。「アンタみたいな父親、死ねば良いんすよ」

さすがに佐山希は開いた口が塞がらないようだった。「誰です?」  
と言いたげに助けを求めて私を見る。

「実に優秀な助手でして……」

「ロープを掛けるところが無くて困っていた、というところですか? だったら、ドアノブにでも掛けて首括ったら良いすよ。それで十分に死ねます。それでも心配だったら、ベッドの脚に縛って窓から飛べばいい。ロープの長さに、階下の窓には届かないだろうから、誰かに見つかる前にきちんと死ねるすよ」

小夜子は部屋を見回しながら高圧的な口調で喋り続ける。その手には金属音を鳴らして鍵がぶら下がっていた。指に紐で下がっている鍵が、ゆらゆらと不吉さを表している。

「渚ちゃんは今哀想すね、アンタが父親で」

「なんだって?」佐山希は不愉快そうに目を見開く。しかし、あまり迫力がない。「探偵さん、上司でしょう? この娘の口を塞いでくださいよ」

「この娘は人の話を聞かないのが仕様です。そこが玉に瑕です」

佐山希は信じられないものでも見るような視線を私に寄こす。

「渚ちゃんがエンコーしていたことに気付いて、それで逃げ出したんすか? それでホントに良かったんすか?」

小夜子の半開きの目は気焔を上げている。ここしばらく陰っていたあの射るような目だ。それを直視できないのか、佐山希は視線を外した。無理もない、全てを白日に晒し、己の卑しさごと焼き尽くされそうな視線。本人も気付いていないのだから余計に恐ろしい。

「別に逃げたつていいすよ。死んだつていいすよ。アンタが苦しくて死にたいと思ってるのを、止める権利を持つてる奴なんてほとんどいない」

「はあ！？ 何を言っているんだお前は！」

佐山希は堪らず怒声を張り上げた。

「死ぬなら、逃げるなら、残された家族が幸せになるように死ぬ、つつつてるんすよ！ 父親らしいこととしてやってから逃げる、つつつてんすよ！！ 訊く前にもちつと考えたらどうすか！！」

考えたつて解りつこない。極論というか、既に暴論である。しかし、危うくそれが正論に聞こえてしまうほどの迫力は、やはりあの瞳が放っているのだ。私はコートのポケットを探って煙草を取り出す。

「な、な…なん…、ハア…。そ、そんなことできる訳ないだろ？！」

「なんだ、解つてんじゃないすか。苦しいときは何したつて苦しはんすよ」

裂帛れつぱくの気合が突然潜み、まるで答えを誘導した交渉人みたいなことを言い出す。単純熱血なんだか、冷静策士なんだか、火と氷が共存しているみたいな人間だ。果たして小夜子は、私の手に負える人間であろうか。

「じゃあ、どうすれば……。一体どうしろつていうんだ。小娘なんか父親を語られたくはない！」

小夜子はそこにたりと笑う。

「殴れば良いんすよ」

「は？」

佐山希は、今日一番の呆け顔を晒した。

小夜子の結論に、さすがの私も苦笑いする他ない。「失礼」と言つてジツポーを鳴らし、煙草に火を点ける。

「自分が父親だったら殴るす。うちの父親も間違っていたら直ぐ殴るす」と言つて小夜子は握り拳を作つてみせる。

「それで解決するのか？」

「少なくとも、自分は間違つたことをしたのかも知れない、とは考えるす。当然、父親のアンタが正しいと思つて殴ることが大事す」

小夜子が父親に殴り倒された時、小夜子は何かを考える暇もなく殴り返したであろうことは黙っておく。私はただ、煙と戯れながら、ことの成り行きを眺めていた。

「それで正しい娘に育つと思うか？」

佐山希の訝しげな顔を受け、「見本がここにいます」と小夜子は自分を指差す。

「ははっ」

思わず笑いを零すと「なに笑ってんすか！」と厳しい声が飛んできた。

「とにかくお父さんは、間違っていると思つたなら、渚ちゃんをきちんと叱るべきです。飴だけじゃダメですよ。飴と拳ですよ」

「そう……だよな？」

佐山希は小夜子の剣幕に押されたのか、ぼそりと呟くように肯首した。その時、私の携帯電話が着信した。マナーモードにしてあったので、振動で気が付いた。この振動パターンはメールのもののだ。空気の読めるメールだとよいのだが。

「あの子は 渚は、僕と向き合ってくれるだろうか。一度逃げ出した僕と……」

「それこそ自分で確かめてください」と小夜子が突き放す。

「ちよつと失礼。これを見てください」

私は携帯電話をかざして佐山希に近づいていく。佐山希はその携帯電話を覗きこむようにして首を前に出す。携帯電話の画面には、佐山渚からのメールが表示されている。

「所…長お……」

同様に覗き込んでいる小夜子がむつとした顔をする。

メールの内容は、『それでも愛してる』だった。この案件を受ける前に、小夜子が私の代わりに送ったメールへの返信である。

「どうして……渚が？」

「奥さんに、私の名刺を渡しておきました」

小夜子は例の仏頂面で私を睨んでいる。

「そうですね。それでも愛してる……か。そんなこと、初めて言われた気がします。こんな父親でも……愛してる……か」佐山希はそのメールの内容を噛みしめるように何度も呟き、仕舞いには泣き出した。

「ちゃんと向き合ってやってください」

「はい……」泣きながら佐山希は頷く。

小夜子はそんな佐山希につかつかと歩み寄った。低いヒールがタイルを鳴らす。

「やり残したことがあるす」

「ま、待て、小夜子くん！」

さすがに止めようと思ったが遅かった。佐山希はソファから跳ねるようにして床に倒れた。筋トレしている小夜子のパンチが炸裂したのだ。佐山希は泣き顔を驚愕の表情に変えている。手加減しているにもかかわらず、大人の男性が女性に殴り飛ばされるなど、あまりお目にかかれない。これは確かに、殴られたほうは考えざるをえないだろう。

「間違ったら殴るす」小夜子は佐山希を見下ろし、「それと、かわうそ君はしまってください」とも言った。

「かわうそ？」

佐山希は頬を押さえ、横たわったまま不思議そうにしている。

「その汚いモノをしまえて言ってるんすよ！！」

小夜子は佐山希の股間を指差し、頬を真っ赤にした般若の顔になる。

「す、すみません！」

佐山希は慌ててベッドに置いてある洋服を身に付け出した。彼もまた顔を真っ赤にしている。殴られた、というのもあるが、うら若き女性に全裸を晒し続けたことへの羞恥心だろう。私だったら自殺を考えるレベルの失態である。

「もあー！ セクハラすよ。訴えて良いすか所長？」

「萌えるか？」

「萌えないすよッ！」

ぷすぷすと頭から湯気を出す小夜子に代わり、今度は私が佐山希に話しかける。

「銀行には何の用事で？」

「へ？ 銀行？」とズボンを履きながら佐山希は不思議そうな顔をする。しかし、直ぐに合点がいったようで「それは言えません」と口をつぐんだ。

「強請られている。違いますか？」

「な……ッ！」

佐山希は絶句した。鎌をかけたのだが、凶星だったようだ。

「いったい誰が？」

「秘密にしておいて貰えますか？」

「はい。都合が悪いようにはしません」

私は都合のよい言葉を選んだ。背後で小夜子の呆れている気配がした。

「娘のことを吹聴されたくなければ、金を振り込めと……。口座名義は長浜愛美、そうなっていました」

私は一応、佐山希に確認した。家族に会いますか、と。佐山希は確かな声で「はい」と言った。

先行するオデッセイは佐山希が運転し、助手席には小夜子が見張りとして乗っている。佐山希が土壇場で逃げ出さないようにだ。その後ろを私の運転するキャロルが追っている形だ。

佐山家へは行きと同じく四十分ほどで到着した。佐山家の居間には、夢さん、佐山七海、佐山渚が揃っていた。佐山渚はぬけぬけと「はじめまして、探偵さん」と言った。

「心配したんだよ！ 馬鹿たれが！ 怪我までして！」

夢さんは鼻息荒く息子の生還を祝福した。それは佐山七海も同じ

だったようで、「良かったあ……」と腰を抜かした。怪我については小夜子の暴挙であるが、怪我の功名ということで黙っておくが吉だろう。

「みんな、心配をかけて申し訳なかった！」

佐山希は深々とこうべを垂れる。

それを見ていた佐山渚だけがそわそわと落ち着きがない。そんな娘のところへ父親である佐山希が向かっていく。

佐山渚は大きな瞳を忙しなく動かし、焦点が定まらない。父親になにを言われるのか、されるのか、不安で仕方ないのだろう。

「渚」

娘にしか聞こえないような、小さな声で希は話しかけた。

「な、なに？」

「小遣いなら父さんがあげる。……もう、しないと約束できるか？」

佐山希は娘を前にして、少なくとも立派な父親であろうとしている。小夜子に殴られていたかわうそ君が別人のようになっていく。

「へ？ え……。う、うん。や、約束する」

佐山渚は不安そうに父親を見ている。そして何故か私を一瞥した。

その瞳は。

「そうか。分かった。でも、お前は悪いことをした」

「え？」

がつ、と音がし、佐山渚が頭を押さえてしゃがみこむ。「いつて

え！」

「なに？ なんなの？」と慌てる佐山七海と夢さん。渚とこの二人にとっては唐突な展開だったことだろう。

「これは、父親と娘の秘密だ」と佐山希は言い、娘に向き直り「渚お父さんを殴りなさい」と言った。

「え？ ええ？」

瞳に涙を滲ませた佐山渚が不思議そうに父親を見る。その瞳は揺れている。

「お父さんも、悪いことをした。みんなを捨てて、逃げようとした。



だから、殴りなさい」

真剣な佐山希の表情に、ただならぬものを感じたのだろう。佐山渚も表情を固くする。

ぺち、と可愛らしい音が居間に響いた。

「それ、本気か？」

佐山希は苦笑いを零しながら娘を見る。小夜子のパンチを食らった後では、佐山渚の非力が妙だったのだろう。

「ほ、本気だよ」

また、ぺち、と鳴る。

次に、ごす、と鳴る。

「なんだか分からないけど、おばあちゃんが代わりに殴つてあげるよ！」と夢さんは腕をぶん回した。佐山希は床に伏している。

取り敢えず、一息ついても良さそうな雰囲気は佐山家には漂っていた。一人を除いて。

小夜子はそんな佐山一家を見て、にやにやと相好を崩していた。

「自分が殴る必要、なかったすね」

「……ああ」

私はどうにも煮えきらずにいた。佐山家を出た後も、脳裏に違和感がこびりついて剥がれなかった。

事務所に戻り、私は小夜子と現状を整理していた。

「佐山希が強請られ、振り込んだ口座は長浜愛美名義になっている。

愛美は長浜洋介の妻、つまり洋介の浮気調査を依頼してきた人物」

私は頭の中で図を描きながら話す。煙草の先端からくゆる煙は、夕日がかすめて複雑な模様を描いている。

「はい。あの時、自分は長浜センセを強請るつもりじゃないか、と言ったす。けど、現状で強請られていると把握できているのは、洋介ではなく佐山希。つまり、」

「愛美は身内ではなく、浮気相手の父親を強請るつもりで依頼してきた……」

私は自分で言っておいて、いまいちピントがズレている気がしてならなかった。窓の外を眺めている私と背を合わせるようにして、事務机に腰掛けている小夜子も同じようだ。「んー……」と唸る声を背中で聞く。

「それだと長浜センセは、奥さんが強請りをしている事実を知らないことに……なるすよね？ もちろん調査依頼のことも。筋は通るんすがね……。なんだろ、この違和感」

小夜子は長い髪で毛束を作り、自分の顔を軽く叩きながら言葉を紡いでいる。パサパサという音が背中ですいている。

「素直に考えればそうなるな。知っていたのなら、なにかアクションを起こしていたはずだ。おそらく違和感は、洋介の動きを把握できていないところにあるのではないだろうか」

煙草の煙は複雑さを抱えながら、やがて天井付近で靄もやへと変わる。「確かに、長浜センセにだけは直接会ってないすからね。思考が読めない」

「直接……、直接……」

私は引つ掛かりを覚えた。その言葉を反芻しながら、佐山渚を思い起こしていた。父親に殴れと言われた渚の揺れた瞳。不安にか？ 動揺にか？ それは何に対する不安と動揺だ？

壮絶な違和感。父と娘の間に横たわる絶望的な食い違い。理屈や道理、論理など、そういうものではない探偵の勘が掴んだ手がかり。刑事や探偵を続けている者の勘は、決して侮れない。いくつもの再会、別れ、修羅場、その喜びや悲しみ、憎悪や妬み、そういう類の空気を感じ、感受性がそれに最適化された人間の勘は、恐ろしく当てになる。

「所長？ なにか分かったすか？」

小夜子が押し黙った私から何事かを感じたのだろう。

「小夜子くん」

「な、なんすか？」

「これは推測とも呼べない、ただの勘なのだが、

佐山渚は援助交際をしていない」

「え？ ……………ええ！？」

小夜子は驚きのあまりか、うつむいていた頭を跳ね上げたようだ。それによって、逆に上を向いていた私の頭と激突した。数秒間、私たちは無言で悶絶した。私と小夜子は苦笑いを浮かべながら話に戻った。

「あの時だ。希が渚へ、援助交際をしないと約束させた時だ。渚は私を一瞥した」

渚は父親との話が、食い違っていることに気が付いた。私に向けた「どういうこと？」という視線。それは父親の行動そのものではなく、父親の行動理由が自分の思っていたものと違ったからだったのだ。

「つまり、お父さんは渚ちゃんがエンコーしてたと思っていたけど、渚ちゃんはそうじゃなかった……ということすね？ でも渚ちゃんは、所長にはエンコーしてたと言ったんすよね？」

小夜子が核心を掴んだ。

「ああ……、そうか。それだ。そういうことが  
「所長？」

「あの夜の渚は、恐らく洋介によって送り出された偵察だった。渚は自分から援助交際の話は出していない。私の失態で、佐山渚から長浜洋介へと、探偵が嗅ぎ回っている事実が露見した」

私は自分の迂闊さを嘆いた。今の今まで気付かなかったとは、そろそろ本格的にどうにかしてきたようだ。

小夜子は色んな感情が混ざって、元の色が分からなくなってしま

った絵師みたいな顔をしている。

あの日、あのコンビニで万引きしようとしていた渚に、私が構わなければ……。まだ真つ当な探偵としての業務範囲で終わらせることができたはずだ。いくら二つの案件が裏で繋がっていようと、それは依頼内容に含まれなければ仕事ではない。だが、既に私は事件の一角にいる。そして、そこから出る気もなくなった。

「所……長……顔、怖いすよ？」と、とりあえず、今日はもう帰って眠ってしまったほうがいいすよ。うん、それがいい！」

「小夜子くん」

「へ?! な……ど、どうしたすか？」

「私は許せないんだ」

「所長……。それは」

そうして出て行った所長は、ずっと事務所で待っていたけれど、次の日の昼になっても帰ってこなかった。電話も通じず、所長の存在をたちどころに見失った。

私は、殴つてでも所長を引き止めるべきだったんだろうか。もう、どうしたらいいのか、分からなくなった。所長がいつも吸っている『HOPE』という煙草を、ストック棚から引っ張り出し、同じく置いてあったライターで火を点けた。

何かの罰なんじゃないかと思うほど、それは臭くて苦しくて、目と鼻に沁みて、咳き込むたびに涙がにじんだ。なんでこんなもの吸うんだろ。なんで居なくなっただんだろ。なんで帰ってこないんだろ。なんで、私はこんなに泣いてるんだろ。

「所長……。小夜子は、所長がわからなくなりました」

次話へつづく

## 6・ぺちとこす(2)(後書き)

最後まで読んでくださった皆様、ありがとうございました！

次話から更にストーリーが展開していきます。ストーリーの核である主人公にまつわる事件なども明かされます。

お暇があれば、また是非おこしく下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3949t/>

---

HOPE & PEACE

2011年7月27日03時25分発行